

スポーツと文化ーベースボールと野球の授業ー

今日の話の流れ

1) 「スポーツと文化」の授業について

2) ベースボールの起源

- ・ 日本野球を武士道野球とする定説について
- ・ ベースボールの起源 ・ ダブルディー、カートライト・ストライクの話
- ・ 日本野球の始まり（明治期から） ・ 正岡子規 ・ 一高～早慶戦 ・ ベーブルース来日

3) 大学での「ベースボールと野球の授業」

- ・ 『星野君の二塁打』からの展開 ・ 道徳教材での扱い

4) 再び「武士道野球」について考える

今日の話で一緒に考えていただきたい内容

キーワード: 武士道野球

①カートライトによって成文化されたのどかなベースボールが、なぜ日本では、武士道野球とも言われるような野球に変質したのか？

⇒明治期にベースボールから野球へと変化する辺りの話をします。

②そもそも武士道野球とは何なのか？

⇒後で、私が捉えている武士道野球についてお話します。

③日本野球を武士道野球に変質していった元は何なのか？

⇒幾つかの人の話を紹介します。

④武士道野球が今なお止まない体罰や部活問題に続いているのか？

⇒私はそう思っていたのですが違う見解もあります。皆さんの意見をうかがいたいです。

⑤ゲームの後に相手チームと飲食を共にして親睦を深めたベースボールはどこに行ったのか？

⇒これは、調べても分からないことなので教えてほしいし、これからも調べたいことです。

私の考える武士道野球とは

武士道野球というのはあらゆる部活問題の象徴でもあるのではないか。
野球に限らず日本独特な部活体制が存在する。

- ①指導者と選手の問題（指導者→選手という一方的な関係）
- ②選手同士の問題（先輩→後輩という一方的な関係）
- ③部活という閉鎖性（外部からは見えない隠蔽体質）

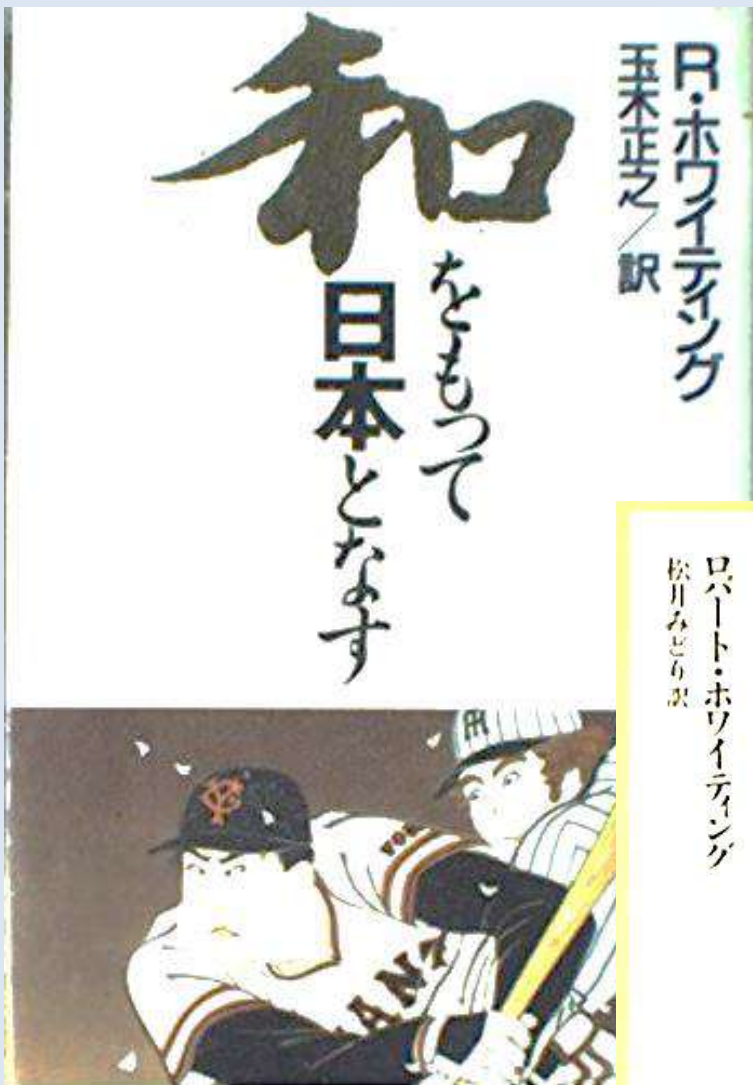
後を絶たない暴力・体罰・ハラスメント

- ・桜宮高校バスケットボール部キャプテンの体罰による自死(2012)
- ・日本女子柔道日本代表選手へのハラスメント問題(2013)
- ・日大アメフト部悪質タックル事件(2018)
- ・日大アメフト部薬物事件(2023)

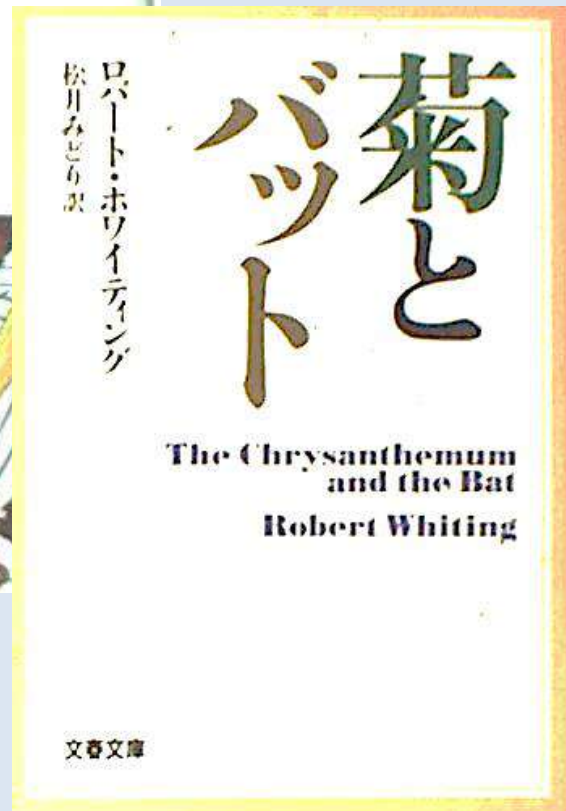


これが武士道野球と深い関連があり部活の中で容認され、継承されていく。

自身の体験：体操部でも酷かった。練習によるいじめが当たり前に行われる。



1992年

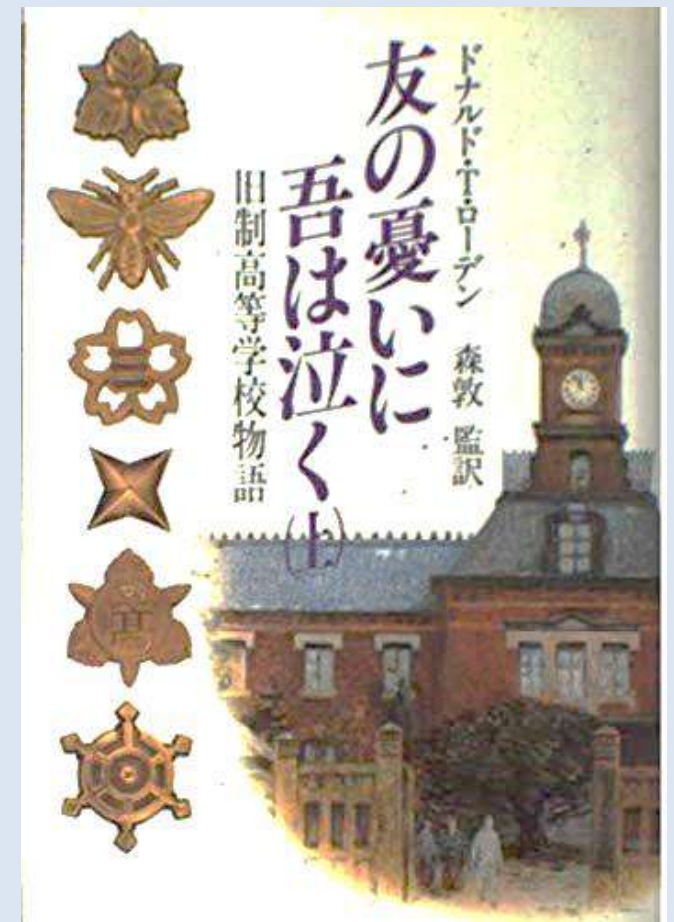


1991年



中公新書
1432

1998年



1983年

娯楽である野球が、武道精神や武士道という日本の伝統的な文化と出会い、精神修養の道具へと変容した。

(R・ホワイティング)



武士道野球とし日本野球を批判(ホワイティング)

坂上康博氏

ドナルド.T.ローデン、R.ホワイティング、佐山和夫らを批判

…日本の野球に関する研究は、依然としてこの「**単純な傾向**」を脱しきれていないということになるだろう。



2001年



1998年

…精神修養や武士道精神といった用語がちりばめられた彼らの主張を、野球が武士道や武道精神といった伝統によって変容したことの“証明材料”として意味づけるという従来の発想が、いかに**事実の片面的な理解に導くもの**であるかは、もはやくりかえすまでもないだろう。(P127)

⇒話の最後に再び取り上げます。

ベースボールの起源

ダブルディー＝クーパーズタウン神話

アメリカ、ニューヨーク州にあるクーパーズタウンは、野球発祥の地とされています。ここには、**野球殿堂博物館**があり野球の歴史を知ることができます。

「ベースボールの起源は、1839年
ニューヨーク州クーパーズタウン
にて、アブナー・**ダブルディー**
によって考案された」

とされていますが、今ではこの
説は、疑わしいとされています。

アブナー・ダブルディ(1819-1893)



野球殿堂博物館
とダブルディー

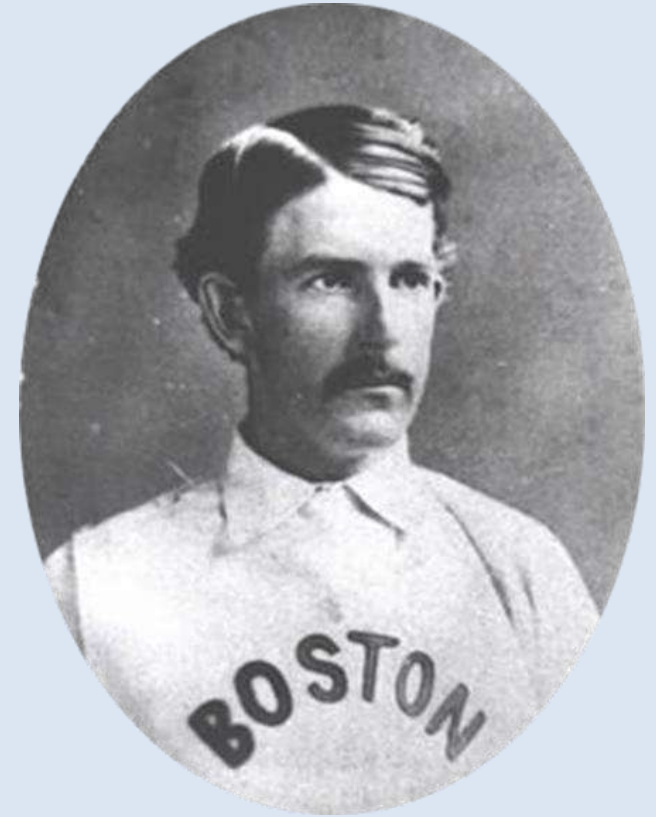


ベースボールの起源

野球の起源を探求したいという動きは、有識者の間で19世紀からありました。中でも、19世紀後半から20世紀初頭にかけてアメリカの野球界をリードした**A.G.スポルディング**は、ベースボールは**米国発祥だと主張**し、起源を調べる**調査委員会の設置**し発足させ、野球が始められたころの事実を調べました。

調査委員会は、『野球の起源に関して知っている情報をお寄せください』と全米中に呼びかけたのです。

その後、コロラド州の元鉱山技師の老人**アブナー・グレイブス**から寄せられた情報に委員会は飛びつきました。1908年のことでした。それは『**1839年にクーパーズタウンで、後の南北戦争の英雄であるアブナー・ダブルデイ将軍により考案された**』というものでした」。



A.G.スポルディング
(1850-1915)

MLBの1870年代を代表する
名ピッチャー。後にスポーツ
用品メーカーを設立する。

ダブルディー・ボール

その調査の結果、委員会からは次のような報告が発表されます。

「野球は確かにアメリカ生まれのスポーツで、イギリスのラウンダースとも、外国のどのゲームとも無関係である。更に、1839年に、クーパースタウンで行われたゲームの考案者は、アブナー・ダブルディーであり、これをもって正式の野球の起源と決定する」

しかし、ダブルディーは、1839年には軍隊にいて、クーパースタウンにはいなかったという話もあり、それ故、神話とされています。

野球殿堂博物館に展示されている「ダブルディー・ボール」に添えられた説明文にはこう明記されている。

Doubleday didn't invent baseball,
baseball "invented" Doubleday.

(ダブルデイが野球を創り出したのではない、
野球界がダブルデイ・ストーリーを創作したのだ)。⇒



ベースボールに似たイギリスのクリケット

アメリカでは、バスケットボール、アメリカンフットボールと共に、野球は最も人気のあるスポーツの一つです。大リーグがアメリカにあることや、1845年にニッカボッカーズという野球協会がアメリカでつくられたことから、アメリカが野球の発祥地と考えられているようですが、野球の元になるゲームはイギリスにも古くからあったのです。

イギリスには、古くから**クリケット**というボールゲームがあります。これは、現在でもイギリスやオーストラリアでは人気のあるスポーツです。13世紀にはすでに人々の間で、農閑期やキリスト教の祝祭日に行われていました。クリケットは、**野球と似ていて、11人ずつの2チームがバットでボールを打ち、得点を競い合うボールゲーム**です。

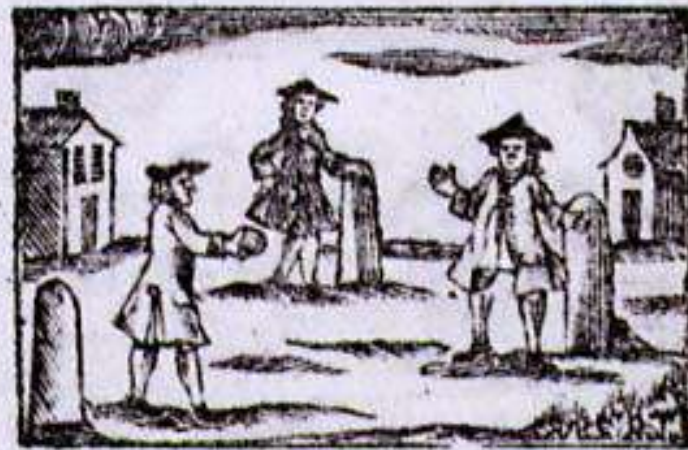


イギリスの「ラウンダース」

イギリスには、**ラウンダーズ**とよばれる遊びもありました。これは、**バットのはたらき**をする**丸い棒とボール**を使います。ベースとして石か棒を地面に4つ置き、2つのチームの間で試合を行ったのです。

その他、1774年にロンドンの子ども達の遊びを紹介した本、『ちいさなかわいいポケット本』の中には、「**ベースボール**」という遊びが描かれています。このように見て行くと、イギリスで古くからあった「クリケット」「ラウンダーズ」などが、野球の始まりで、アメリカでスポーツとして広まっていったと考えられます。

The little k Play.



BASE-BALL.

THE *Ball* once struck off,
Away flies the *Boy*
To the next destin'd Post,
And then Home with Joy.

MORAL.

Thus *Britons* for *Lucre*
Fly over the *Main* ;
But, with *Pleasure* transported,
Return back again.

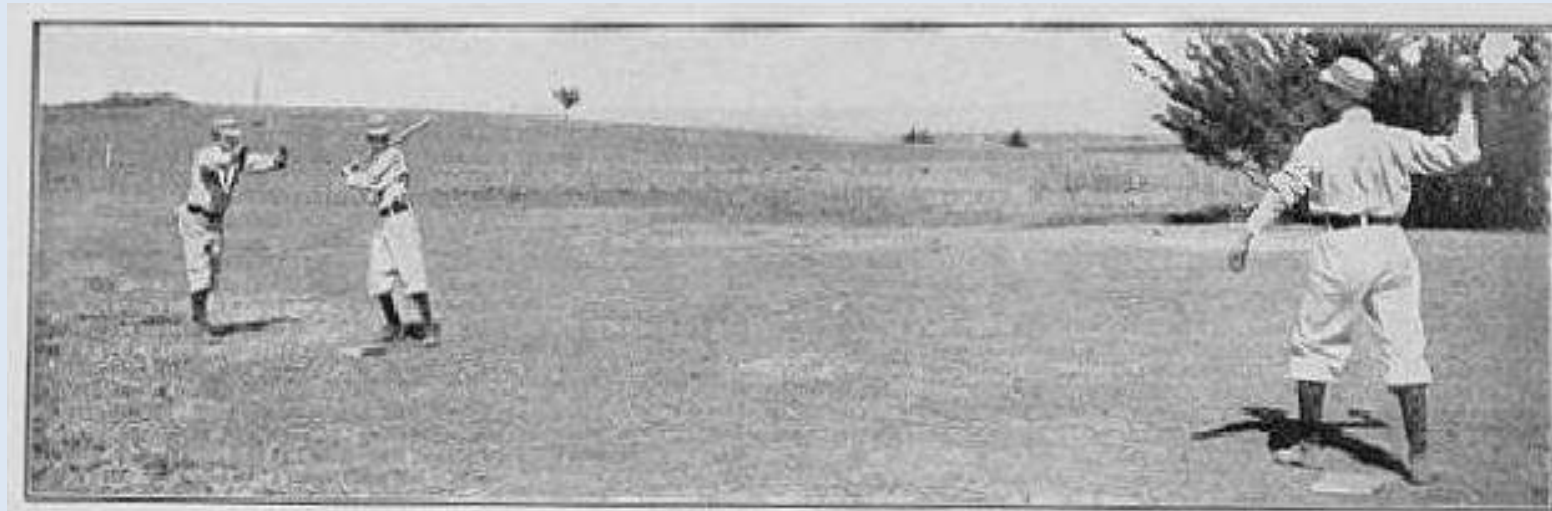
TRAP-

「ワン・オールド・キャット」

19世紀の初め、アメリカ東部の子ども達の間でワン・オールド・キャットとよばれる遊びがはやっていました。

固い物に糸を巻いたボールを下手で投げて、それを棒で打ち返す遊びです。これは、2人での遊びで、一人の守りと一人のバッターで行いました。

これが、2人の守りと2人の攻撃ならツー・オールド・キャット、3人対3人ならスリー・オールド・キャットというふうに使われていたのです。



ONE OLD CAT



TWO OLD CAT

タウンボール

北東部の町ボストンでも若者たちの間で同じような今の野球に近いゲームが行われており、**タウンボール**と呼ばれていました。**クリケットを簡略化したゲーム**は、町の重要な親睦の場にもなっていて、屋外でプレーでき、みんなで楽しめるレクリエーションとして広がっていったのです。



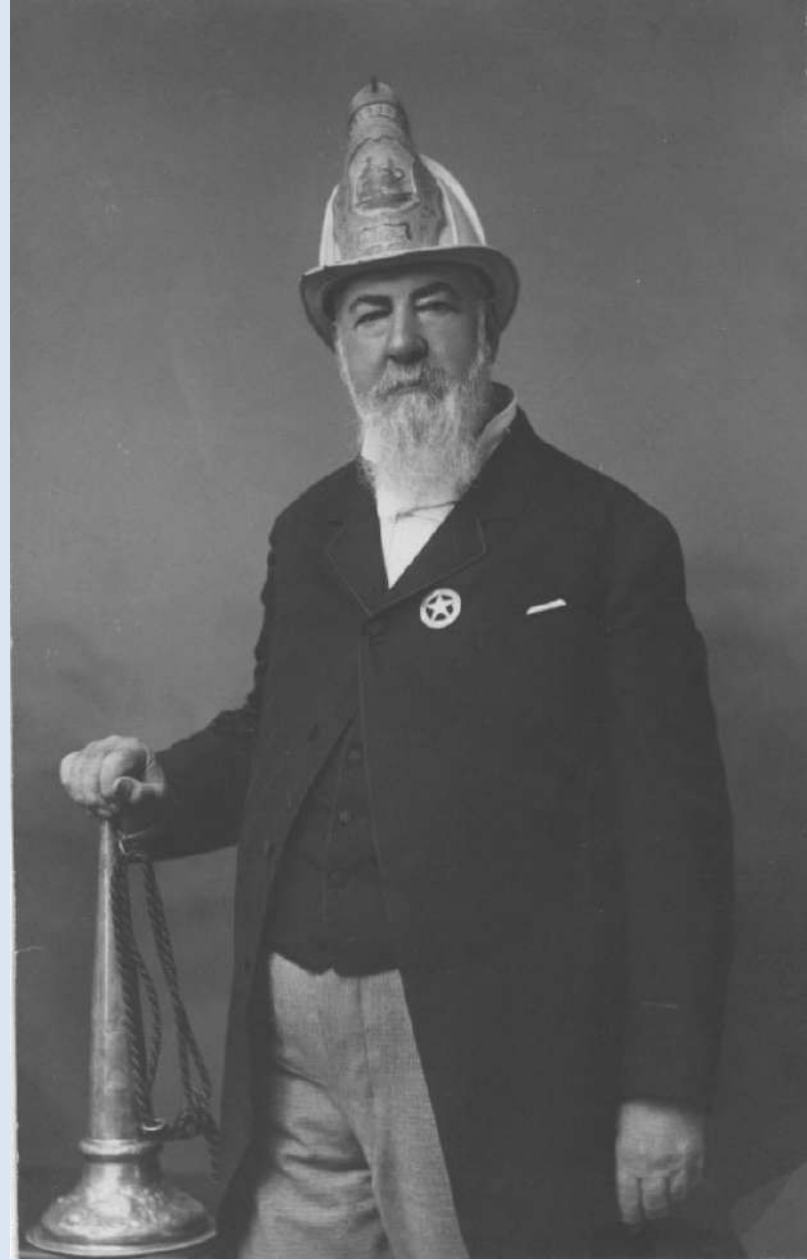
このように、アメリカ東海岸の各地で、それぞれのちがったやり方で、**野球に似た遊び**がさかんに行われるようになりました。やがて、アメリカでも産業革命が起こり、鉄道がしかれ、交通が発達してくると、はなれた地域のチームと交流試合をするようになってきます

ベースボールのルールの整備

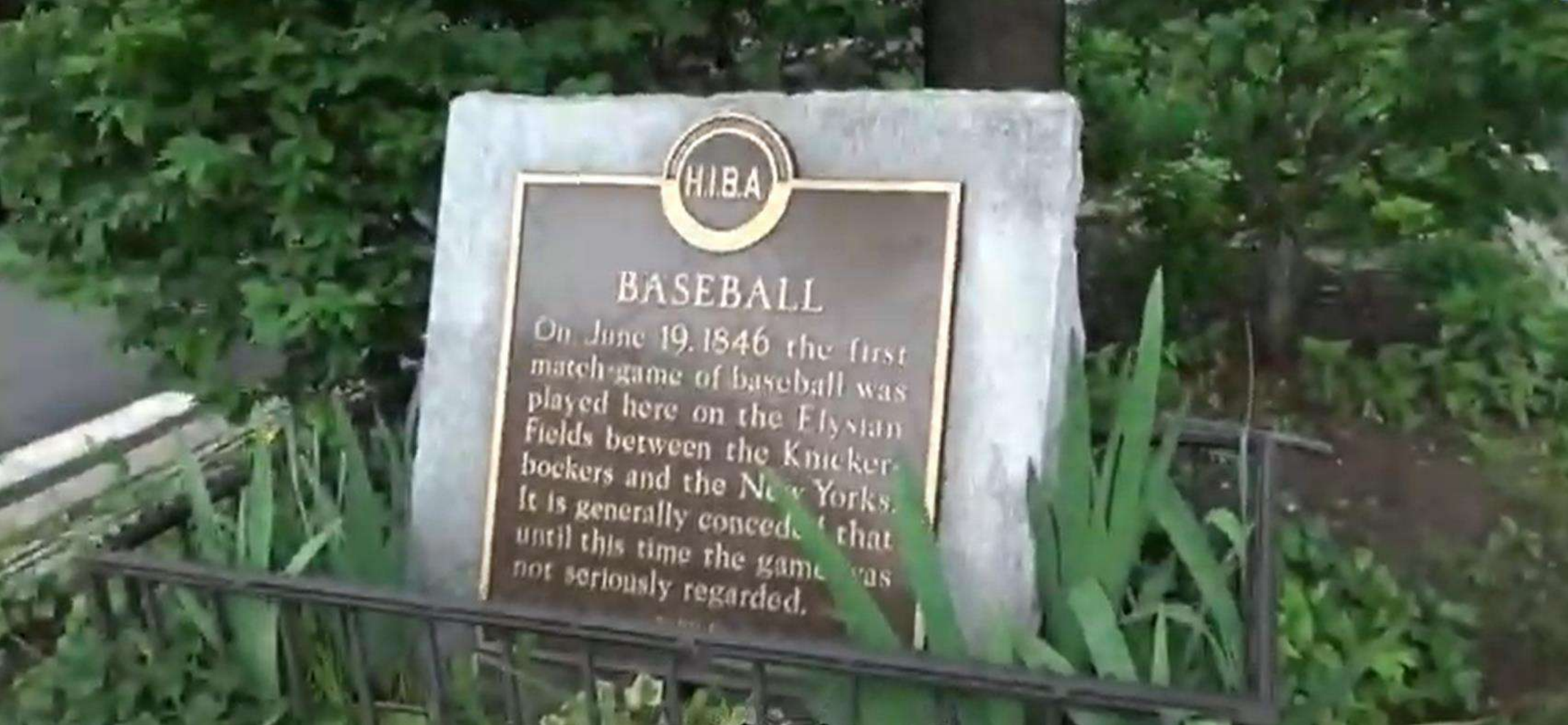
1842年にタウンボールを楽しむ**社交クラブ**として**ニッカーボッカー・ベースボール・クラブ**を設立されました。クラブは会員制で、プレーの際にはユニフォームも着用し、試合後は対戦したチーム同士が食事を取るなどもしていたようです。

そのクラブの中心的な指導者が、ニューヨーク市の消防団員だった**アレキサンダー・カートライト**でした。1845年、初めてルールを成文化しました。後に“野球の父”と言われます。

1846年6月19日、そのルールに沿ってニュージャージー州**ホーボーケン、エリシアン・フィールズ**で試合が行われ、これがベースボールの誕生とされています。



アレキサンダー・カートライト
(1820－1892)



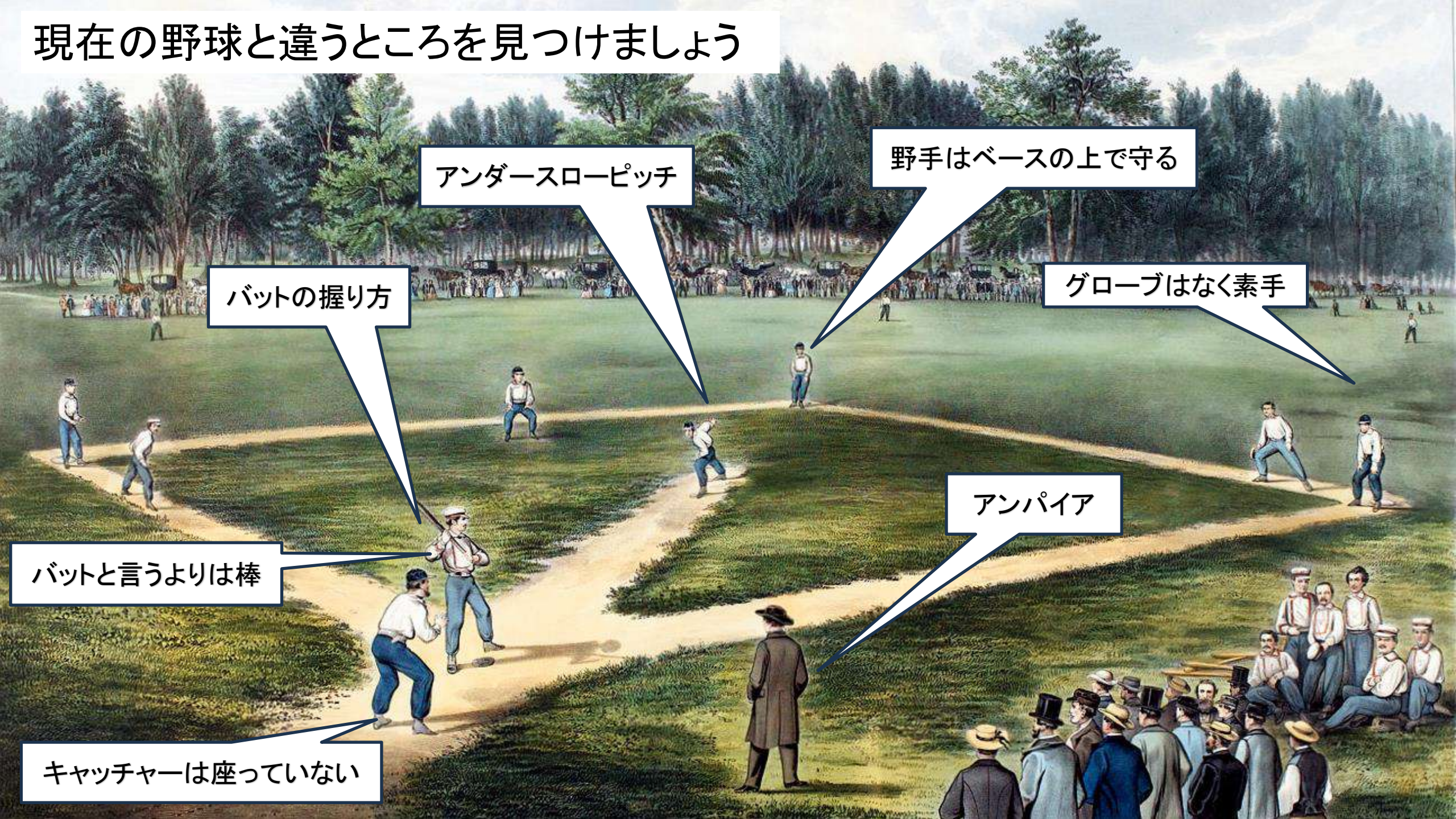
1846年6月19日 このエリジアン・フィールドで、ニッカーボッカーズと
ニューヨーカーズとの間で、ベースボールの最初の試合が行われた。

ニューヨーク・ニッカボッカーズ(向かって左)と対戦相手のチーム(1858年)



BASE BALL TEAM 1858

現在の野球と違うところを見つけましょう



アンダースローピッチ

野手はベースの上で守る

グローブはなく素手

バットの握り方

アンパイア

バットと言うよりは棒

キャッチャーは座っていない



カートライトが当初発案した野球ルール(ニッカーボッカー・ルール)

これらの規則はその後細部に修正が加えられながら現在に至っている。

- 1条) メンバーは決められた時間通りに集合すること。
- 4条) ベースは4つとし、二塁と本塁の間の距離は42フィート、一塁と三塁の間の距離は42フィートとする。
- 8条) 先に**21点を取ったチームが勝ち**となる。
- 9条) 打者に対する**投球はピッチ**で、スローではない。投手が投げるべきにするボールは打者のハットに向けて投げないとする。
- 10条) 打者が一塁線、三塁線より外に打てたボールはファウルとする。ファウルはストライクと数えない。
- 11条) 打者が3度空振りし、3度目の空振りのボールを捕手が捕球するか、フライを取るか、ワンバウンドで野手がボールを掴むとアウト。だが、野手が失策して掴まなかったら、打者が走者で塁に立てる。(現在の振り逃げ)
- 12条) バットで打ったか、かすったボールが**直接またはワンバンドで捕らえられたら打者はアウト**にする。
- 13条) 走者は野手によりボールに触れるとアウトとなる。だが、走者にボールを**ぶつけることは禁止**される。
- 15条) **3つのアウトで攻守を交替**する。
- 16条) 投手は1つのイニングから打者へのストライクを取るべきにする。
- 18条) 打者が打ったファウルの球をストライクにならないとする。
- 19条) 投手が**ボーク**を犯したとき、走者はワンベース進塁できる。この走者をアウトすることはできない。
- 20条) 野手が打者の打った打球のバウンドを許すと失策にする。

ニッカーボッカークラブ初めての試合

1846年6月19日、ニッカーボッカークラブとニューヨーククラブとの間で、新しいルールによる初めての試合が行われました。この試合で、**カートライトが審判**をつとめました。結果は、4回、23対1で、ニューヨーククラブが勝っていますが、当時の野球のルールは、現在といくつかの点で大きく違っています。

第1に、勝ち負けの決定が、現在のように、**9回制ではなく、21点を先に取った方が勝ち**となるところです。初めての試合でも、4回で23点も入っていることから、今と比べ、はるかに点が入りやすかったことが想像できます。

第2に、ピッチャーが現在のソフトボールと同じ**アンダーハンドピッチ**でした。また、今のよう、審判が、一球、一球、ストライクとかボールとか言うきまりもなく、もちろん、**フォアボールもありません**。だから、打者は、打ちやすいボールが来るまで待つことのできる打者中心ののどかなゲームでした。

第3に、打者が打ったボールは、現在のルールでは、ノーバウンドで取らなければアウトになりませんが、当時のルールでは、**ワンバウンドでもアウト**になったのでした。

ストライクの話

【ストライク】＝“打て”という意味

アンパイヤは誰に向かって“ストライク”
と言っているのか？

バッターに向かって“打て”と言っている
ようには見えないけど・・・。



当時のベースボールルール

- ・ピッチャーはボールをアンダーハンドで投げた。
- ・ピッチャーはピッチャーボックスの中から投げた。
(ピッチャープレートではない)
- ・バッターはハイボールとかローボールとか自分の好きなストライクゾーンを要求できた。
- ・ワンバウンドでも捕球すれば、バッターはアウトになった。
- ・グローブはなく素手、キャッチャーはワンバウンドでボールを捕球した。
- ・ボール 9 球でバッターは一塁に進む。

ストライクの定義

7つもある

- (a) 投球を空振りした場合
- (b) 投球が（地面に触れないで）ストライクゾーンの部分を通過した場合
- (c) 打者が（0 ストライクか 1 ストライクの時）ファウルした場合
- (d) バントして、ファウルとなった場合
- (e) 投球を空振りして、それが打者の身体（着衣）に触れた場合
- (f) 投球が地面に触れることなくストライクゾーンで打者に触れた場合
- (g) ファウルチップになった場合

元々ストライクのコールはなかった

ベースボール誕生（1845年）の頃は、「**ストライク**」**コールは行われていません**でした。創設者のアレキサンダー・カートライトが創った最初のルール（20項目）の第11条には「三球を空振りした打者はアウトになる」旨が書かれていますが、**コールについては何も書かれていません**。なぜなら、コールをしなくても空振りは誰でもわかるからです。



当時のピッチャーの役割は、打者から三振をとったりする事ではなく、とにかく打ってもらうことが大きな仕事だった。打ってもらって、走者をアウトにしようと野手が活躍します。

（走者対野手のゲーム様相）

「ストライク!」は見逃しコールから始まった。

打者も打ちやすいボール(球)がきたら打つのが常識ですが、どうせ打つなら大きな一本を打とうと考えて、本当に大好きなボール(球)が来るまで**何球も見逃すという事態**も生じてきました。何球見逃してもアウトにはならなかったのです。



それを見ていたアンパイアは、遂に「見逃しストライク」コールが出現しました。その時に、審判が発した言葉が、

“good ball, strike!”

「いい球だ、打ちなさい!(バットを振りなさい)!” (1858年)

“good ball, strike!”が“strike!”に

その後、“good ball, strike!”の前半部分である
“good ball”が省略されて、現在コールされている
"strike!" (ストライク)になりました。

1858年の「見逃しストライク」 コールは、現在のルールブックで言うと (b)投球が（地面に触れないで）ストライクゾーンの部分を通過した場合、に該当し、当時は、それ以外の6種類の内容は含んでいなかったのです。

- ・ ストライクが「肩から膝の上」となるのが1885年
- ・ 「ストライク3つでアウトになる」のは1888年

社交・親睦を重んじたベースボール

ニッカーボッカークラブのルールの中に、「一方が21点取った方を勝ちとする」という条文がありました。

19世紀当時は試合の後に親睦会がありました。試合後に相手チームを食事に招いて、親睦を深め合うのが習慣になっていたようです。チームにはお抱えの料理人がいて、料理人は懇親会に向けて料理を作らなければなりませんが、21点先取ルールではいつ試合が終わるかわからないため、料理をどのタイミングで作り出せばいいのか困り果てていました。「ある程度、試合終了時間を予想できるような仕組みにしてほしい!」とカートライトに相談した所、彼は試合を回数（イニング）で区切ることを思いつきました。結果、現在も続く9回までに得点数の多いチームが勝ちというルールに落ち着いたのです。

当時は、**親睦のパーティーを含めたものがベースボール**だったのです。

21点先取制から9回制へ(1857年)

アメリカスポーツの特質であるスピード化へ

ベースボールを支える思想は？

スポルディングは、ベースボールはアメリカ発祥とし、その歴史的純血を守るため、「大人」の「男らしい」スポーツであるベースボールをイギリスの「子ども」も「女の子」たちも一緒に遊ぶ**ラウンダーズから峻別**したかった。

その歴史的背景にはアメリカ人の**生の様式**、ベースボールにおける「**男らしさ**」への**強烈なこだわり**があった。



アメリカ人の生の様式＝

「ベースボールほど、アメリカ人の**勇気、信頼、闘い、アメリカ人の突進力、規律、決断力、アメリカ人の活力、意気込み、熱情、気迫、粘り、実行力、精神、賢明さ、成功、そしてアメリカ人の気力、活気、力強さを体現するスポーツはない。**」「これは、新大陸への入植以来、**フロンティア**を西へ西へと切り拓いていった**開拓者たちの理想化された姿**と云ってもいい。」（A.G.スポルディング）

ベースボールの特質

自己決定（決断力） 適材適所 社交 民主主義⇒チームワークの重視（合意形成）

▶ここまでのまとめ

イギリスで行われていた**クリケット**や棒とボールの遊び**ラウンダーズ**がアメリカ大陸に持ち込まれた。アメリカの東海岸では、今のベースボールに近い**タウンボール**というゲームが行われていた。



これらからベースボールが生まれたのでした。

しかし、**野球の発祥がアメリカ**だとすることにこだわるために、わざわざ**野球起源調査委員会**まで作り3年間に渡る調査を行った。



「ベースボールは、1839年州クーパーズタウンにて、アブナー・ダブルディーによって考案された」とした。（ダブルディー＝クーパーズタウン神話）



この神話に中心的な役割を果たした、A.G.スポルディングのベースボールに対する**強いこだわり**を読み取ることができる。

日本に伝わったベースボール

- ・ **ホーレスウィルソン**が開成高校に来て野球を伝える。(1872・M5)
- ・ 開成高校の学生と横浜居留民（外国人）が試合をする。(1876・M9)
- ・ **平岡澂**がアメリカから帰国し、新橋アスレチック倶楽部をつくる。(1878・M11)
- ・ **正岡子規**が活躍した一高の時代、**インブリー事件** (1890・M23)
- ・ **一高**時代(1890～1904)
- ・ 早稲田、慶応が一高に勝利し、**早慶**時代へ (1904・M37)
早慶戦の中止 (1906～1926)
- ・ 中学野球大会（高校野球・夏）の始まり (1915・T4)
- ・ 選抜中等学校野球大会（高校野球・春）の始まり。
甲子園球場完成 (1924年・T13)
- ・ アメリカ大リーグを招待。**ベーブルース来日** (1934年・S9)
- ・ プロ野球チーム巨人軍の設立 (1934年・S9)
- ・ プロリーグの発足 (1935年・S10)

日本野球発祥の地

学士会館の敷地内に、野球のボールを握った手の記念碑があります。これは日本に初めて野球を伝えたとされる**ホーレス・ウィルソン**の野球殿堂入りを記念して、2003年（平成15）に建立された「日本野球発祥の地」のモニュメントです。

ホーレス・ウィルソンは教師として、1871（明治4）年にアメリカから来日し、1872（明治5）年から6年間、この地で授業のかたわら生徒達に野球を教えました。

記念碑はブロンズ製で、高さ2.37メートル。ボールには世界地図が描かれ、**アメリカと日本を縫い目によって結ぶ**ことで“野球の国際化”を表現しています。



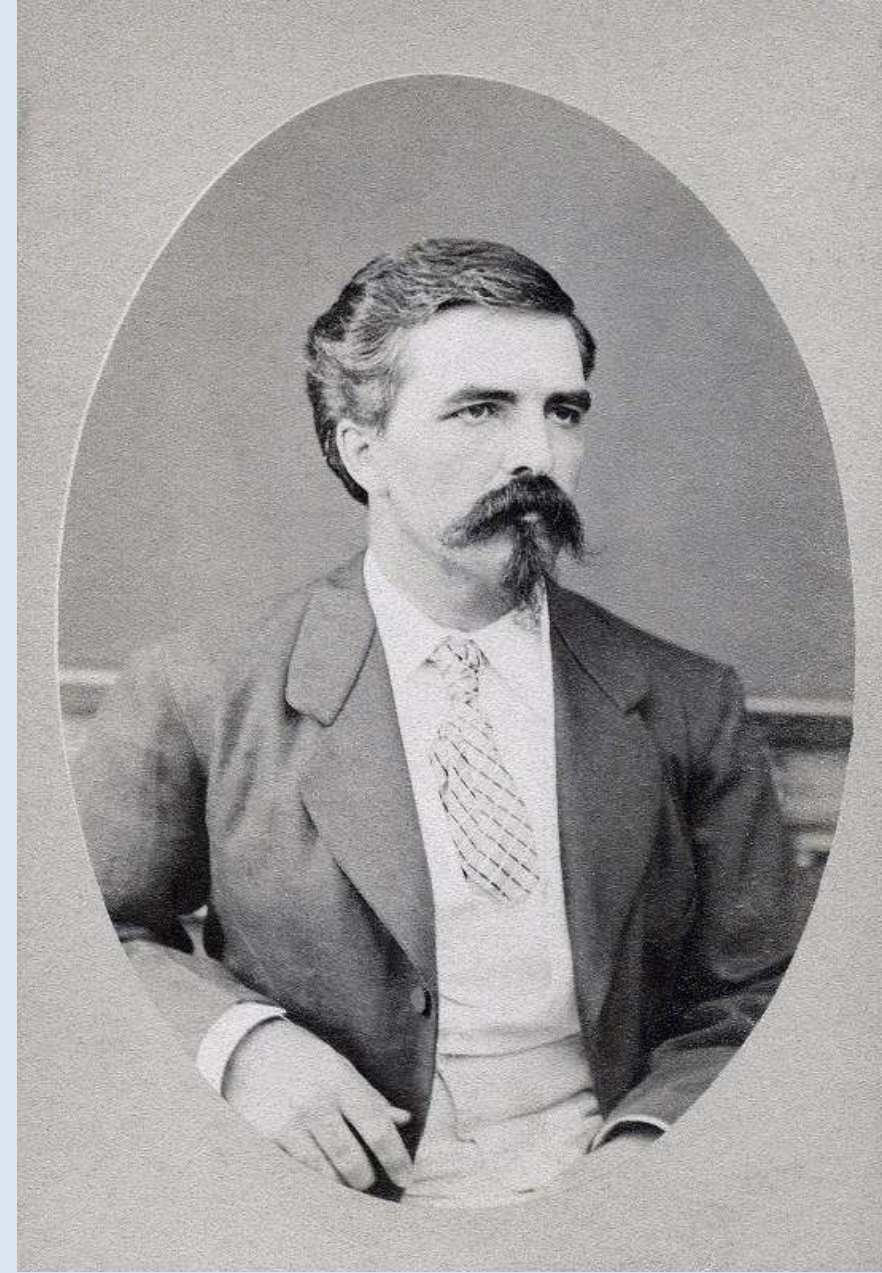
「日本野球発祥の地」と記されている。

日本の野球の始まり

ホーレス・ウィルソンはお雇い外国人教師として、1871（明治4）年にアメリカから来日。1872（明治5）年から6年間、東京開成学校（後の東京大学）で教鞭をとりました。

南北戦争に志願したことから、戦争の時に知ったベースボールを英語や数学を教えるかたわら、生徒達に野球を教えました。
（1871年8月～1877年7月）

これによって日本全国に野球が広まったとされています。



ホーレス・ウィルソン（1843～1927）

1876年(明治9年)のベースボール

1876年(明治9) 東京開成高校と横浜居留民が対戦して、11対34で外国人チームが勝利しています。これは、日本における初の国際試合と言えます。(ホーレス・ウィルソンも3番レフトで出場)

<明治初期のベースボールのルール>

- ・ピッチャーはボールをアンダーハンドで投げた。
- ・ピッチャーはピッチャーボックスの中から投げていた。
- ・バッターはハイボールとかローボールとか自分の好きなストライクゾーンを要求できた。
- ・ノーバウンド、ワンバウンド捕球すれば、バッターはアウトになる。
- ・グローブはなく素手、キャッチャーはワンバウンドでボールを捕球。
- ・ボール9球でバッター一塁に進む。

平岡 澁(ひらおかひろし)

1871年(明治4) 16歳の時、アメリカのボストンへ留学し、機関車をつくる技術を身につけて1876年に帰国。その時、バットとグローブを持って帰る。

新橋鉄道局に勤めるようになった平岡は、野球の好きな仲間を集めて**新橋アスレックス**という**野球チーム**をつくる。1878年(明治11)強いチームだったが、平岡が鉄道局を退職した1887年に解散する。

正岡子規に野球を教えている。

その後、野球の中心は、**第一高等学校(今の東京大学)**に移り、学校から野球が広まる。(アメリカではプロ野球から野球が広まっていったのとは対照的)



平岡 澁(1856～1934)

※1872年鉄道開通 (新橋-横浜) 29km



新橋アスレチック倶楽部(中央が平岡熙)

正岡子規とベースボール

明治時代の野球の選手、私は誰でしょう？

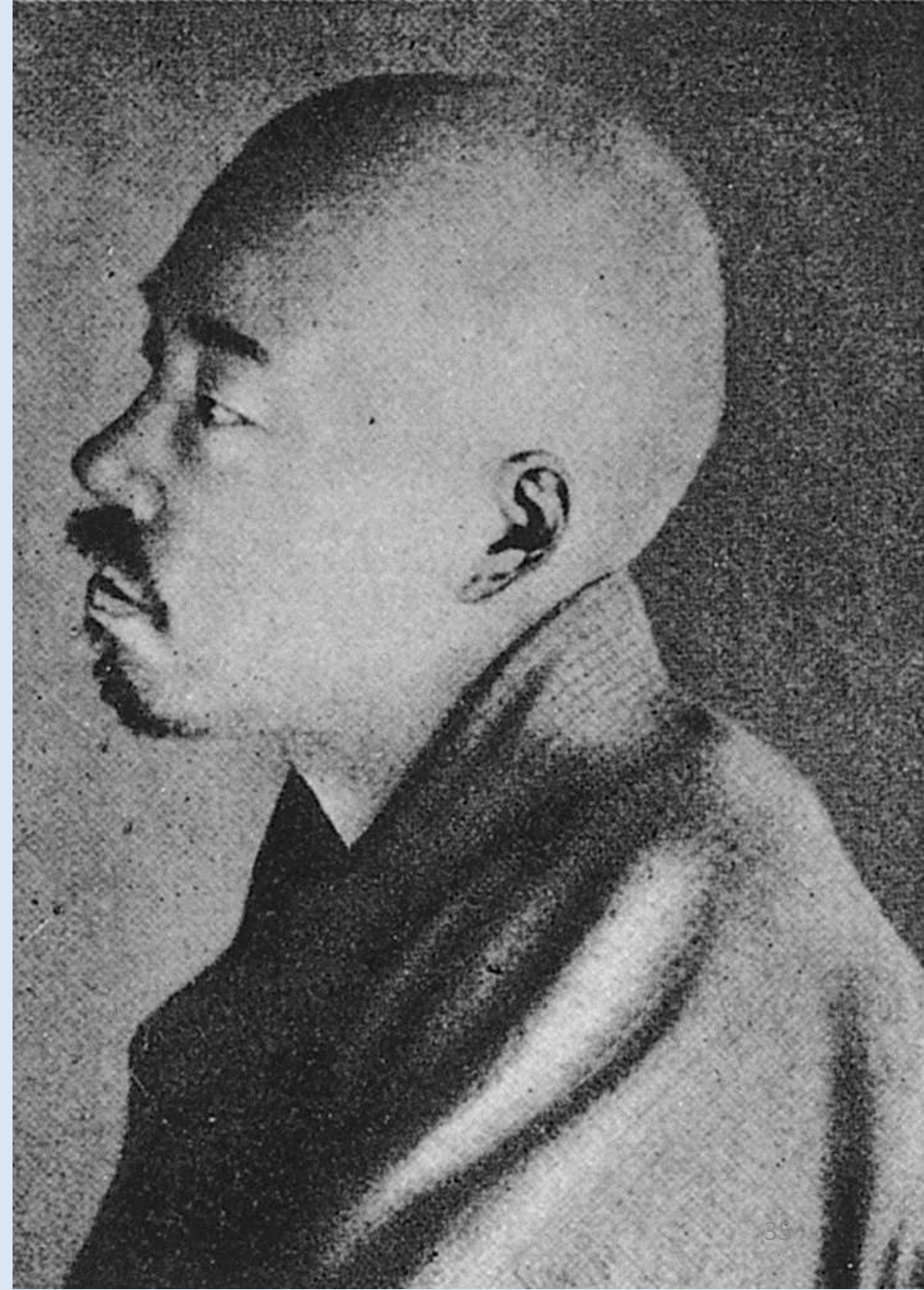
【ヒント】

- ・ 野球殿堂（東京ドーム）にこの人の写真がある。
- ・ 俳人 雅号が野・球「の・ぼる」（○○升）
- ・ 「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」

正岡子規(1867-1902)

・ 本名は正岡常規。幼名を處之助、後に升(のぼる)と改める。俳句、短歌、新体詩、小説、評論、随筆など多方面にわたり創作活動を行い、日本の近代文学に多大な影響を及ぼした、明治を代表する文学者の一人である。

・ 一高でベースボール夢中になる。「打者」「走者」「四球」「死球」「飛球」など、現在でも使用されているベースボール用語を訳している。



正岡子規(1867-1902)

久方のアメリカ人のはじめにし

ベースボールは見れど飽かぬかも

有名な歌人である正岡子規は、学生時代は野球選手として活躍し、明治時代の日本野球史に深くかかわった人でもあります。この歌の意味は、「アメリカ人の始めたベースボールというものは、いくら見てもあきないなあ。」になります。(久方は、天「あめ」にかかる枕詞で、天とアメリカをかけあわせています。)

今やかの三つのベースに人満ちて

そぞろ胸のうちさわぐかな

この短歌を詠んだとき、子規は既に寝たきりの生活を強いられていました。1898年(明治31)3月車夫に抱え上げながら、人力車に乗っての上野、神田、両国などを見物。一年ぶりの外出でした。泳ぐ人を見てベーすぼーる短歌を九首作ったのでした。



1890年3月撮影

©野球殿堂博物館

正岡子規 ベースボール九首

正岡子規はベースボールのナインにちなんで短歌を九首作っています。これを詠んだのが1898年(明治31)31歳の時で、既に肺結核におかされ寝たきりの生活を強いられていました。

久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも
國人ととつ國人と打ちきそふベースボールは見ればゆゝしも
若人のすなる遊びはさはにあれどベースボールに如く者はあらし
九つの人九つの場を占めてベースボールの始まらんとす
九つの人九つのあらそひにベースボールの今日も暮れけり
打ち揚ぐるボールは高く雲に入りて又も落ち来る人の手の中に
なかなか打ち揚げたるはあやふかり草行く球のとゞまらなくに
打ちはずす球キャッチャーの手に在りてベースを人の行きがてにする
今やかの三つのベースに人満ちてそゞろに胸の打ち騒ぐかな

正岡子規の生い立ち

1884年9月:大学予備門予科に入学、ベースボールに出会う。

新橋アスレチック倶楽部の平岡を訪ね(ベースボールの)指導を受ける。

1886年 : ベースボール会メンバーとして対外試合に出場する。

1888年8月:鎌倉・江ノ島へ旅行中に初めての**喀血**

1889年5月:二度目の**喀血**、医師に肺結核と診断⇒子規(ホトトギス)と号す。

1889年8月:松山の自宅で**大喀血**

1890年3月:ボール会第4回大会に出場(最後の試合)キャッチャー1番 5月:インブリー事件

1895年4月:従軍記者として遼東半島に赴く。森鷗外と親交を深める。帰国の船上で**大喀血**

(5月)神戸病院に入院、須磨で療養。

(8月)松山で50日余、夏目漱石の下宿(愚陀仏庵)で静養する。

(10月)帰京途中、奈良で**柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺**の句を詠む。

1896年3月: **脊椎カリエス**と診断され腰部を手術する。

4月: **再手術も失敗**し寝たきりとなる。

1898年5月: 車夫に抱えられ一年ぶりに人力車で外出

べーすぼーる短歌を9首作る。

1899年7月: 座ることさえ困難になり寝たきりになる。

1900年8月: **大量喀血**、漱石が子規を訪ねる。

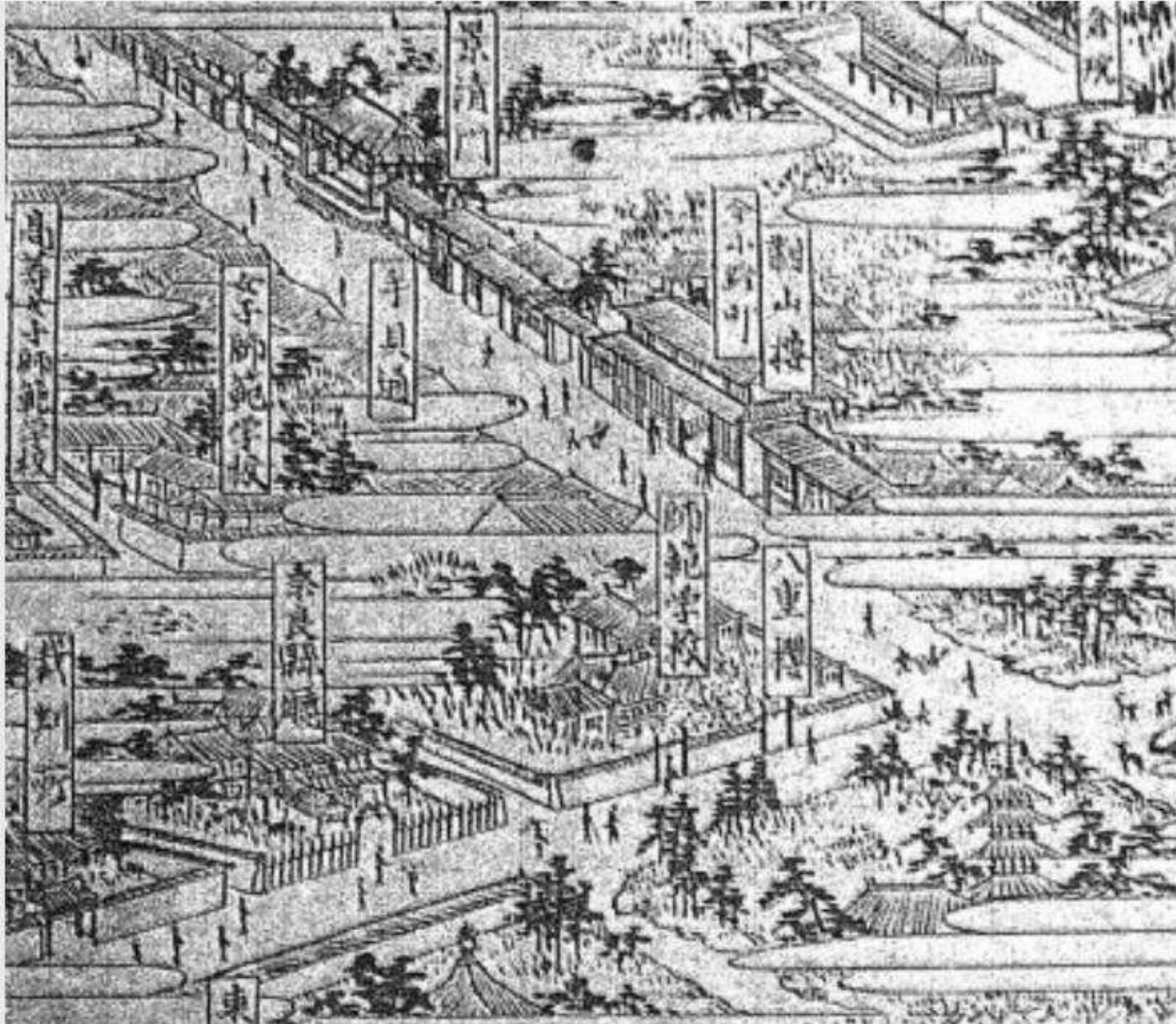
1902年9月19日: 死去(34歳)

↑
子規が
ベース
ボールを
行ってい
た期間
↓



柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺・・・実は

- ・子規は1895年（M28）10月26日、大阪より奈良へ到着。市街、興福寺、若草山遠望、東大寺、手向山遠望、春日大社を訪ね對山樓角定（たいざんろう かどさだ）に宿泊。
- ・翌27日には奈良坂、般若寺、興福寺、東大寺周辺を散策。法華寺、西大寺、垂仁天皇陵、薬師寺、唐招提寺を訪ね、法隆寺、竜田川を訪れています。この時に、詠んだのが「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」でした。
- ・1901年随筆「くだもの」に、東大寺の鐘を聞きながら柿を食べたことを記しています。その中の「御所柿を食ひし事」によれば、ここで子規は夕食後、女中が柿をむいてくれました。
「秋暮るゝ奈良の旅籠や柿の味」
- ・・・その柿は御所柿（ごしょがき）と言い、御所市特産の甘柿である。「羊羹のように甘い」と評されます。「柿も旨い、場所もいい。余はうつとりしているとボーンという釣鐘の音が1つ聞こえてきた」、これは東大寺の初夜（午後7時）の鐘でした。また、「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」の句は、夏目漱石の俳句「鐘つけば銀杏ちるなり建長寺」にヒントを得て作られたとも言われています。
- ・27日の天候は雨模様だったそうです。子規には法隆寺を詠んだ句が他にも幾つかありますが、それらは「いく秋をしぐれかけたり法隆寺」のように雨を読み込んでいます。柿食えばの句は、雨の中で詠んだというのでは似つかわしくありません。



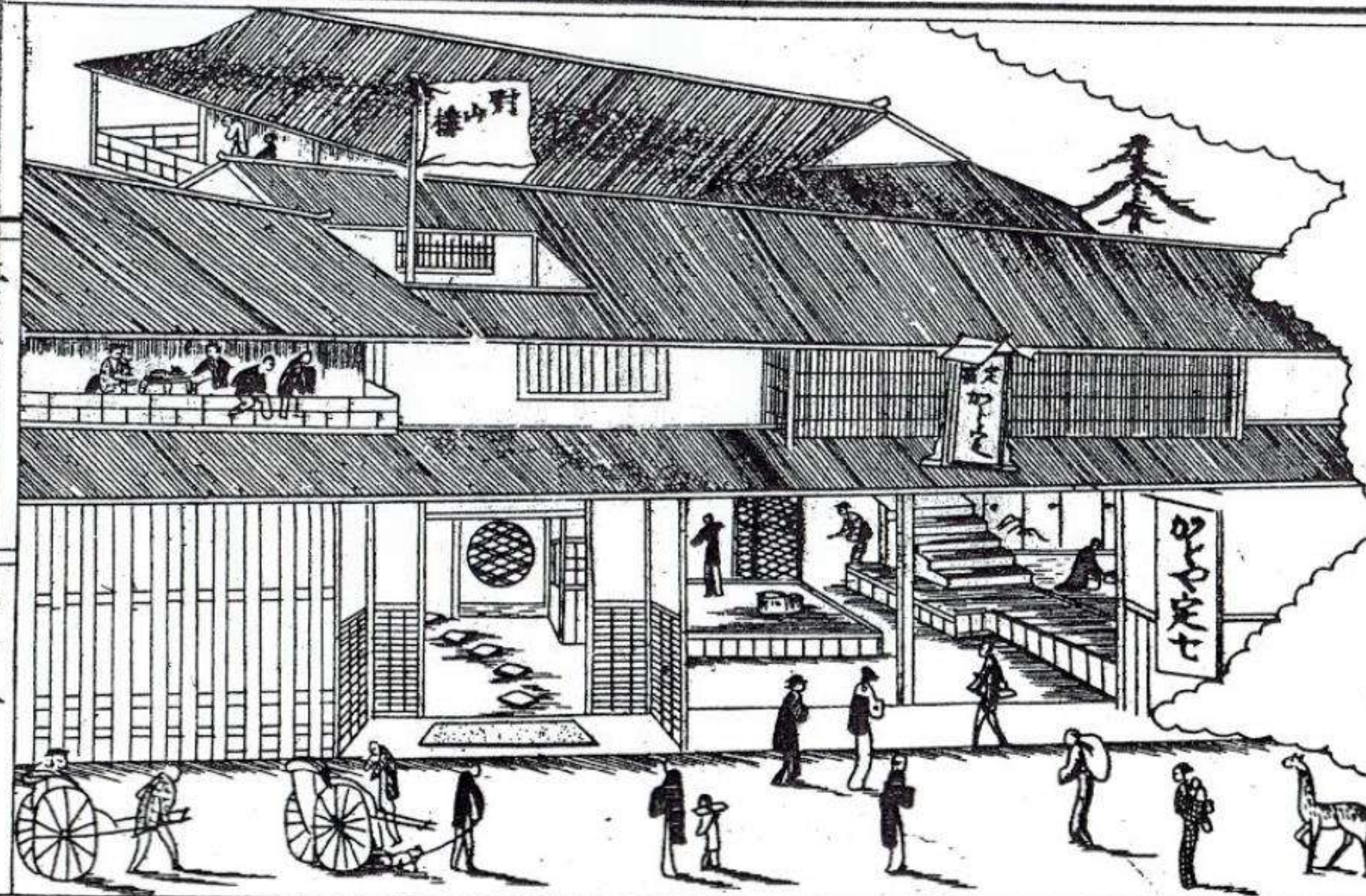
東京市赤坂區福吉町二番	幸次	九條道孝
口番	陸行	伊藤可宗
東京市麹町區永田町二丁目	内閣總理大臣	伊藤博文
東京市麹町區永田町二丁目	陸軍大臣	西鄉從道
東京市大手町三丁目	總務大臣	山縣有朋
東京市赤坂區宮前町三丁目	工部大臣	後藤有明
東京市永田町三丁目	幸次	三條公美

對山樓「宿止人名控帳」

旅籠屋業

奈良
今小路町

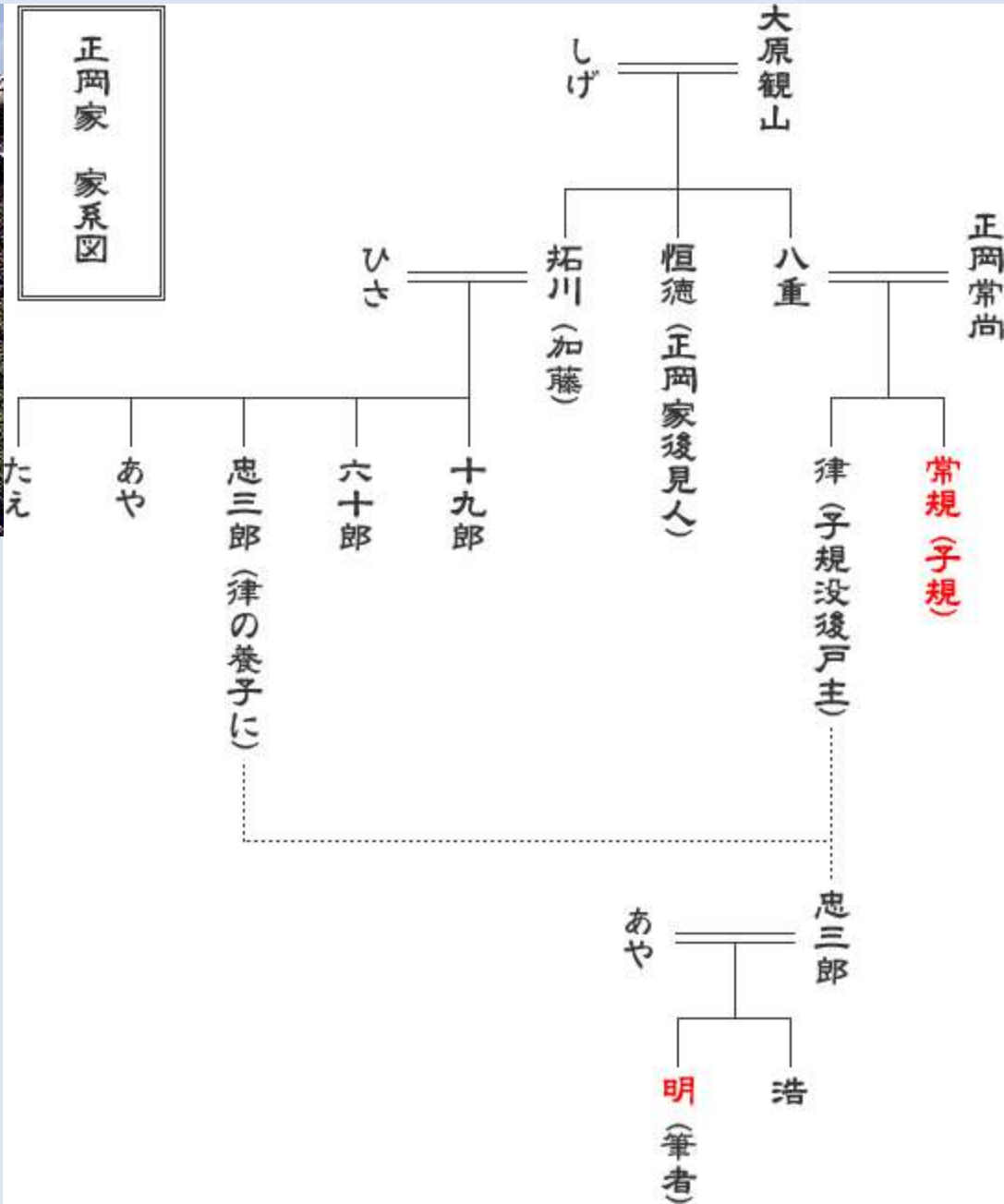
角屋定七



對山樓(たいざんろう)角定(かどさだ)は、現在は天平俱樂部という日本料理店に



奈良での老舗の旅館は、「對山樓」「菊水樓」「三景樓」が有名です。對山樓は、大正8年(1919)に一度廃業します。戦後、再び営業を始めますが、1963年(昭和38)に完全に廃業しました。對山樓の跡地(日本料理天平俱樂部)には、「子規の庭」があり、子規が宿泊した当時からの柿の古木があります。





正岡子規とベースボール

- 1884年(17) 平岡瀬からベースボールの指導を受ける
- 1886年(19)1月：この年からベースボールに熱中する。ベースボール会メンバーとして試合に出る。ベースボールを弄球(ろうきゅう)と訳す。
- 1887年(20)7月：神田の下宿から一高宿舎に入る。(12月に常磐会寄宿舍に転居)
7月中旬～8月末：松山に帰省し、道後公園で藤田主計らとベースボールを行う。
12月：一高寄宿舍ベースボール試合で、白軍キャッチャーを務める。赤軍の勝ち。
- 1888年(21)鎌倉旅行中に初めての咯血、9月:常磐会寄宿舍に入る。
- 1889年(22) 5月：2度目の咯血、子規(ホトトギス)と号する。
7月～9月：松山に帰省、療養。河東碧梧桐にベースボールを教える。
11月：一高のベースボール大会に参加する。
12月：常磐会寄宿舍で「ボール会」を設立、ベースボール大会を行う。
- 1890年(23)3月:ユニフォーム姿の写真を撮る。
：第4回寄宿舍ベースボール試合に出場キャッチャー1番(最後の試合)
5月17日:一高と明治学院の試合を観戦、インブリー事件に遭遇
7月：松山に帰省、高浜虚子にバッティングを披露する。

正岡子規がベースボールに熱中したのは、1884年～1890年3月

正岡子規の行ったベースボール

- ・ピッチャーの投球がホームベースの上を通過し、ワンバウンドした後でキャッチャーがこれを素手で受け止める。
- ・打者は、自分の目から胸まで (Hight Ball)、胸から腰まで (Faiv)、腰から膝まで (Low) の三つのなかから、自分の好みの高さの投球をピッチャーに要求することができる。（ピッチャーは、打者に打ちやすい球を投げなければならなかった）

※アメリカでは1870年(1887年に廃止)

- ・投球方法も最初はアンダーハンドピッチ

※アメリカでは、腕を肩の高さまで上げるサイドスローが認められたのは1883年になってから。
1884年にはオーバースローが合法化される。

- ・ボール9球出塁制
- ・審判は打者の後ろ(キャッチャーの後ろではない)に立ち、キャッチャーの補球のじゃまにならないよう注意しながらボール、ストライクを宣告し、またアウトとセーフの判定を下した。
- ・これを聞きながらホームの右側に置かれた教室用の机で記録をつけるのが書記の役割。

ベースボールは一高(東大)から

1882年(明治15)、平岡熙が、新橋に専用の野球場「保健場」を開設します。多くの学校がこの場所で野球をするようになり、この中に波羅大学という学校がありました。1886年(明治19)に明治学院と改称、本場アメリカ仕込みの野球を行って、実力を蓄えて行きます。この段階までの、日本での最強チームは、一高ではなく明治学院でした。

1886年(明治19)、一高(第一高等学校)は、第一大学区第一番中学校が名前を変えた学校で、今の東京大学のことです。

1887年(明治20)に学校の中に寄宿寮ができ、正岡子規をはじめとする多くの学生たちが一緒に生活をするようになります。そして、グラウンドができると、**多くの学生が野球部に入り**、練習をするようになりました。

1890年(明治23)に、明治学院(今の明治大学)から挑戦状を受け試合を行います。一高が6回までに6点をリードされていたこの時に**インブリー事件**が起こり、試合が中止になります。

インブリー事件

1890年(明治23年)5月17日、一高は、明治学院(今の明治大学) から挑戦状を受け、試合を一高のグラウンドで行うことになります。このチームは、アメリカの先生に指導を受けた強いチームで、試合も、6回までに明治学院が6点をリードしていて、一高が負けていました。

そのような時、応援をするために明治学院のインブリー先生は試合開始時間に遅れて到着します。グラウンドの正門が閉ざされていたため、大学の関係者であることを伝えて中に入れるよう求めたのですが、英語を理解できない守衛に断られました。そこで、正門から入るのを諦めて垣根を越えてグラウンドに入ると、これを見咎めた一高柔道部員が憤慨してインブリーを取り囲んだのです。

一高生にとって、この垣根はただの垣根ではありません。人間を磨きあげるための道場としての学校を、世間と区別するための魂のこもった垣根であったのです。しかし、アメリカ人のインブリー先生にしてみれば、魂のこもった垣根を理解できなかったのは無理もないことでした。

インブリー事件 正岡子規はこの場面を観ていた

試合もリードされていて、いらいらしていたのでしょうか。アメリカ人が垣根をのりこえるのを見て怒った**学生の一人が石を投げる**と、イムブリー先生の眉間に当たってしまいました。先生の顔から**真っ赤な血が流れ**ました。あたりは騒然となりました。騒ぎは収まりましたが、試合はすぐに中止になってしまいました。

一高の応援席には正岡子規が観戦しており、日記にこの事件の様子を書き残しています。

十八日学校と明治学院とのベースボール・マッチありと聞きて往きて観る。第四イニングの終りに学校は已二十余程まけたり。其まけかた見苦しき至り也。折柄明治学院の教師、インブリー氏学校の垣をこえて入り来りしかば、校生大に怒り之を打擲し負傷せしめたり。明治学院のチャンピオンにも負傷ありければマッチは中止となりたり。

この事件が、一時外交問題に発展しそうになったのですが、インブリーの配慮で事件は収まりました。一高生にとっては、野球は**単なる楽しむスポーツではなく、人格形成の場**だったのです。

ベースボールが野球と訳される

日本の野球は明治から始まるのですが、「ベースボール」という外来語がどうして「野球」と呼ばれるようになったのか。そのことについての説明文が、かつての六年生国語の教科書に出ていました。

ベースボールが初めて日本に伝えられたのは明治5年ごろであるが、長い間、この球技は、「ベースボール」または「ベース」という外来語の名前で呼ばれてきた。「野球」という訳語が生まれたのは、明治27年秋のことである。そのころ、第一高等学校(今の東京大学教養学部)で、ベースボール部の歴史を編集するときに、マネージャーをしていた**中馬庚**(ちゅうまかのえ)という人が、「野球」という訳語を思い付いたという。**「広い所(野)でやる球技」**という意味であろう。

「野球」と「ベースボール」から(小学校国語六年下)

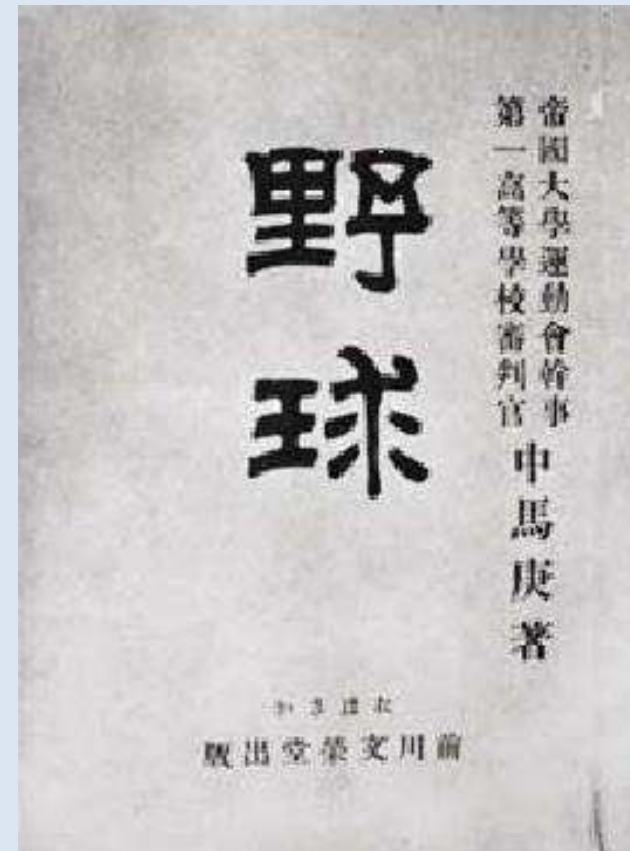


中馬庚(ちゅうまかのえ)

ベースボールが野球に

この言葉にほかの選手たちも賛成し、翌28年2月に、「校友会雑誌」の号外として、「野球部史」が刊行された。これが、「野球」という言葉が活字になった最初である。明治20年代から30年代にかけての時期は、全国に急速に広まった時期であるが、それとともに「野球」という呼び名も、全国各地に広まり、やがて定着するようになったのである。(以下略)

「野球」と「ベースボール」から(小学校国語六年下)



※正岡子規自身の幼名である「升（のぼる）」にちなんで、「野・球（のぼーる）」という雅号を用いたこともある。これは、中馬庚がベースボールを野球（やきゅう）と翻訳する4年前の1890年（明治23年）のことで、読み方こそ異なるが「野球」という表記を最初に用いた人物となる。しかし、これはベースボールに対する訳語ではなく、あくまで自身の雅号として使っていたものであったため、中馬庚が初めてベースボールを野球と訳したことになる。

一高時代の到来

インブリー事件は、国内外の新聞でも取り上げられ大きな反響を巻き起こしました。結局一高側がインブリー本人と明治学院その他関係者などに謝罪し、インブリーもこれを不問にふすことで事態は収束しました。自分たちの力のなさを恥じ、それから猛練習が始まります。そして、明治学院との再試合では、26-2の大差で勝ちます。

1895年（M28）当時、邦人チームの中で向かうところ敵なしだった一高野球部は、横浜のアマチュア外人倶楽部に何度も試合を申し込んでいたが断られていた。そして、再三の試合申し込みに折れ、1896年（M29）5月にアメリカ横浜居留地YCACチームとの対戦が実現

青井鉞男とピッチャーボックス⇒

◇第一戦 5月13日 29対4 勝（ピッチャー青井鉞男）
一高野球部員は汽車にて新橋から横浜へ。400名を超える寮生達も応援
日清戦争（1894-95）後の「欧米に追いつけ」という風潮の中、単なる野球試合の勝利以上の意味を持って受け取られ、新聞で報道された。

◇第二戦 6月5日 32対9 勝 ◇第三戦 6月27日 22対6 勝
◇第四戦 7月18日 14対12 負

- ・これらの試合が野球ブームや野球チームを生むきっかけとなる。
- ・第4戦の後にキャッチャ以外もグローブを使用、科学的打ち方を採用。



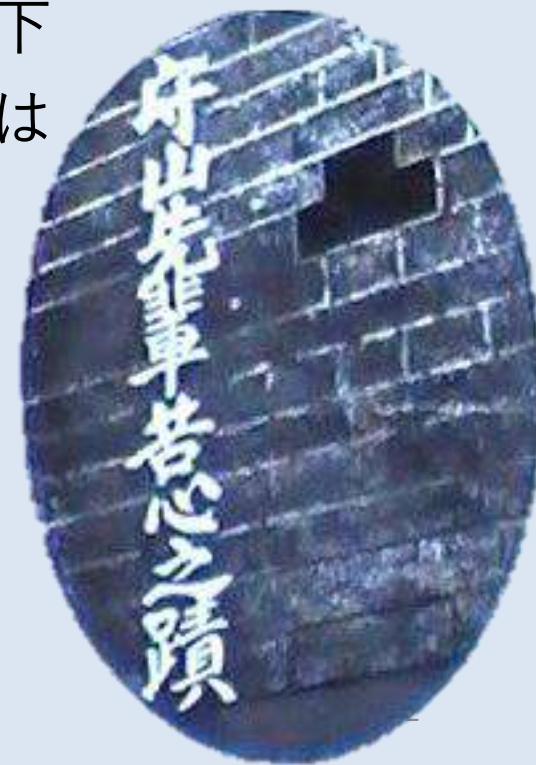
一高時代

青井鉞男が1897年(明治30)に卒業すると、青山学院や二高(東北大)との試合に破れて、一時期は不振の時期が続きました。この不振の時期に「死の練習」とも言うべき猛練習を行うのでした。

1901年(明治34)横浜外国人チームとの試合に5対6で負け、**守山恒太郎**は敗戦投手となりました。守山はコントロールを良くするために昼夜問わず一人投球練習を行いました。疲労により腕が伸びなくなれば、桜の木にぶら下がって腕を伸ばし投げる。また曲がれば伸ばしを繰り返し、しまいには煉瓦の壁に大きな穴が空いたと言われています。守山だけでなく、その他の選手も同様の猛練習を行いました。翌1902年(明治35)、同じく横浜外国人チームとの試合は4対0で勝ちました。

(ピッチャー守山)**猛練習が美談として語られるのでした。**

一高全盛は、1904(明治37)年に早稲田、慶応に敗れるまで続き、その後は早慶の時代となります。



一高校風と武士道野球

ベースボール（スポーツ）を**教育の手段**として捉えるところから「一高野球」は生まれました。野球に限らず、スポーツは**本来の「娯楽」や「社交」**にはならなかったのです。

エリート意識と国家主義の中で生まれてきた「文武両道」路線のなかで、スポーツ（ベースボール）は私的な「お楽しみ」ではなく、「文武の諸技芸を奨励するため」と位置づけられました。

一高野球の特徴

- ①優勝劣敗の**勝利至上主義**
- ②**精神主義** **武士道**から来るもの
- ③**集団主義**—それは、学校から国家や日本精神へと拡大していく。

一高野球の流れを汲んだ**武士道野球**が、早稲田、慶応へと引き継がれ普及していくのでした。

早慶戦へ

野球熱 の高まり

野球の中心は、一高から、**早稲田**、**慶應**に移って行きます。

1885年 慶應義塾大学野球部設立

1897年 早稲田大学野球部設立

1903年 第一回早慶戦 11対9で慶應の勝利

毎年秋に3回勝負の早慶戦を行うことを決める。→**野球ファンの拡大**

1905年 第1戦は0対5で慶應の勝利

第2戦は1対0で早稲田の勝利

第3戦は3対2で早稲田の勝利（延長戦を制す。）

1906年 第1戦は1対2で慶應、第2戦は3対0で早稲田

第3戦が中止→1925（大正14）まで中止



早稲田が慶應に送った挑戦状



1906年早慶第2回戦→

論毒害野球

1911年(明治44)まで東京朝日新聞で『野球と其害毒』8月29日～9月19日の連載コラム。学生達が野球にのめり込むことに対する批判を校長たちが批判を行いました。

- ①野球に熱中するあまり、**学業がおろそか**になる。
- ②野球人気で、**選手は華美に**流れ、風紀上の問題も発生する。
- ③生徒の一部だけが選手であるという**選手制度上の問題**。
- ④早慶などが野球を学校広告に使うなど、**私立学校の人気取り**に利用している。
- ⑤入場料を徴収するなど**興業化**している。
- ⑥野球そのものが「対手を常にペテンにかけよう、計略に陥れよう、塁を盗もうなどという**巾着切り遊技**であり、相手に下劣なヤジを飛ばすなど**不作法**」
- ⑦不自然な運動で**発育上有害**。肩を壊して兵役検査不合格になったものもいる。

「巾着切り（スリ、泥棒）の遊戯」 第一高校校長 新渡戸稲造

「全校生の学力減退」攻玉社講師 広田金吾

「徴兵に合格せぬ」順天中学校校長 松見文平

「選手悉く不良少年」曹洞宗第一中学校校長 田中道光

「必要ならざる運動」 学習院長 乃木希典

●野球と其害毒(十二)

△選手悉く不良少年

▽（昭和）第一中學校長 田中 道光氏談

○人々
本年三月頃私の學校で十名程悪い事を
した學生を出した、宗教家養成の學校で

●野球と其害毒(三)

△疑問又疑問

▽陽原専門學務局長談

近頃野球が盛になつて來て試合の勝負表は、勝敗の相違を詳しく書く様になり、従つて色んな事が耳に入るので、近頃非常に氣に持つて出した、入場料を取る體たが、正式に取を出して、取れを受けて居るのだから、其入場料が何處であつて何處へ這つたんだか、詳しく訊て見たいと思つて居る、又野球の選手は、練習料なども免除し氣になつても手加減をして居るんぢやないかと云ふ、慶應學務局長が今度來したに就て、金は何處から出て、先方でも如何なして、如何なる體面と云ふて居るかと云ふ、

●萬人凡一人位

天才でなくては出来ぬものがある、そのが正料も勉強し、そのに於ては、身に過勞を蒙る、故に運動本體に不平の種は、子供に於て、日本で子供の教育に於て、規定の科目以外の、何と云へば、今日の、

野球害毒論

野球害毒論に対して東京日日新聞、読売新聞らが積極的なスポーツによる教育論を展開し、野球擁護の論陣を張ります。

- ・ **安部磯雄**（早稲田大学野球部長）が東京日日新聞で『**学生と野球**』9月1日～24日、において反論した。「…多くは野球に対しての門外漢であるから頓珍漢の論議が多い」

- ・ **押川春浪**（早稲田大学OB、作家）が読売新聞で『**學生界の爲に辯ず**』反論、新渡戸に対して「野球論に於ては、眇たる市井の一門外漢」と表現

- ・ 「野球問題大演説会」を読売新聞の主催で演説

新渡戸の「巾着切り競技」に対して、

⇒どんな競技でも相手のスキを突いて優位に立つ、そういう要素は少なからずある。野球に限らず、世の中で受け入れられているスポーツで計略に陥れようとしないものなど存在しないと言っている。

この演説が成功すると、東京朝日新聞の非買運動にもつながり、野球害毒論は敗北に終わりました。

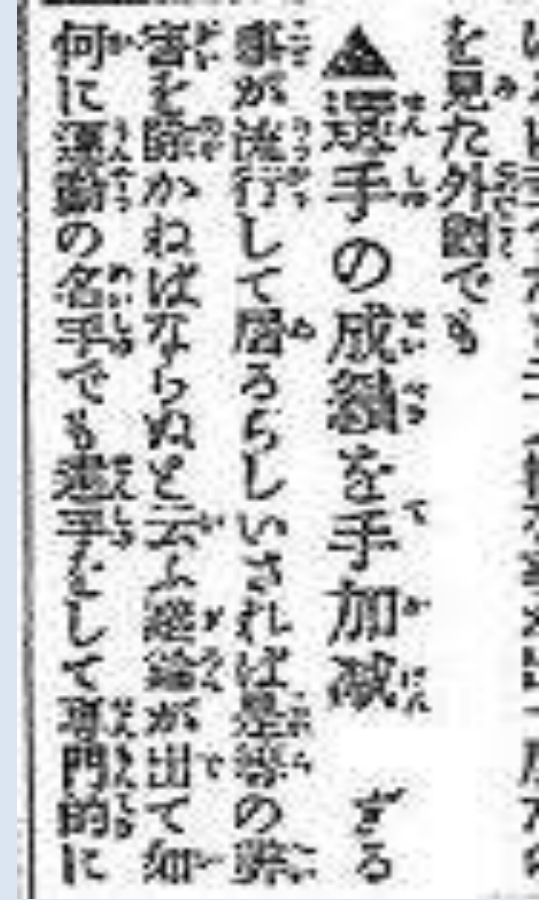
野球害毒論

野球擁護派は東京日日新聞（毎日新聞）や読売新聞、報知新聞の紙上で反論を行ったため、これらの新聞と朝日新聞は野球を巡って**一種の販売合戦**となりました。

当時の学生野球人気は非常に高く、結果的に**擁護派が大勢を占める**こととなり、朝日新聞は部数を減らしていきます。不買運動もあり、これに危機感を抱いたのか、朝日新聞は「野球は悪いという意見が多い」というアンケート結果を一方的に掲載し、唐突に野球害毒論を終了してしまいます。

その後、大阪朝日新聞は、青少年の善導指導という名目で、高校野球の主催者となり、甲子園大会を開催するに至りました。**「爽やかで好ましい野球と青年」**というイメージの物語の作り手となっていたのでした。

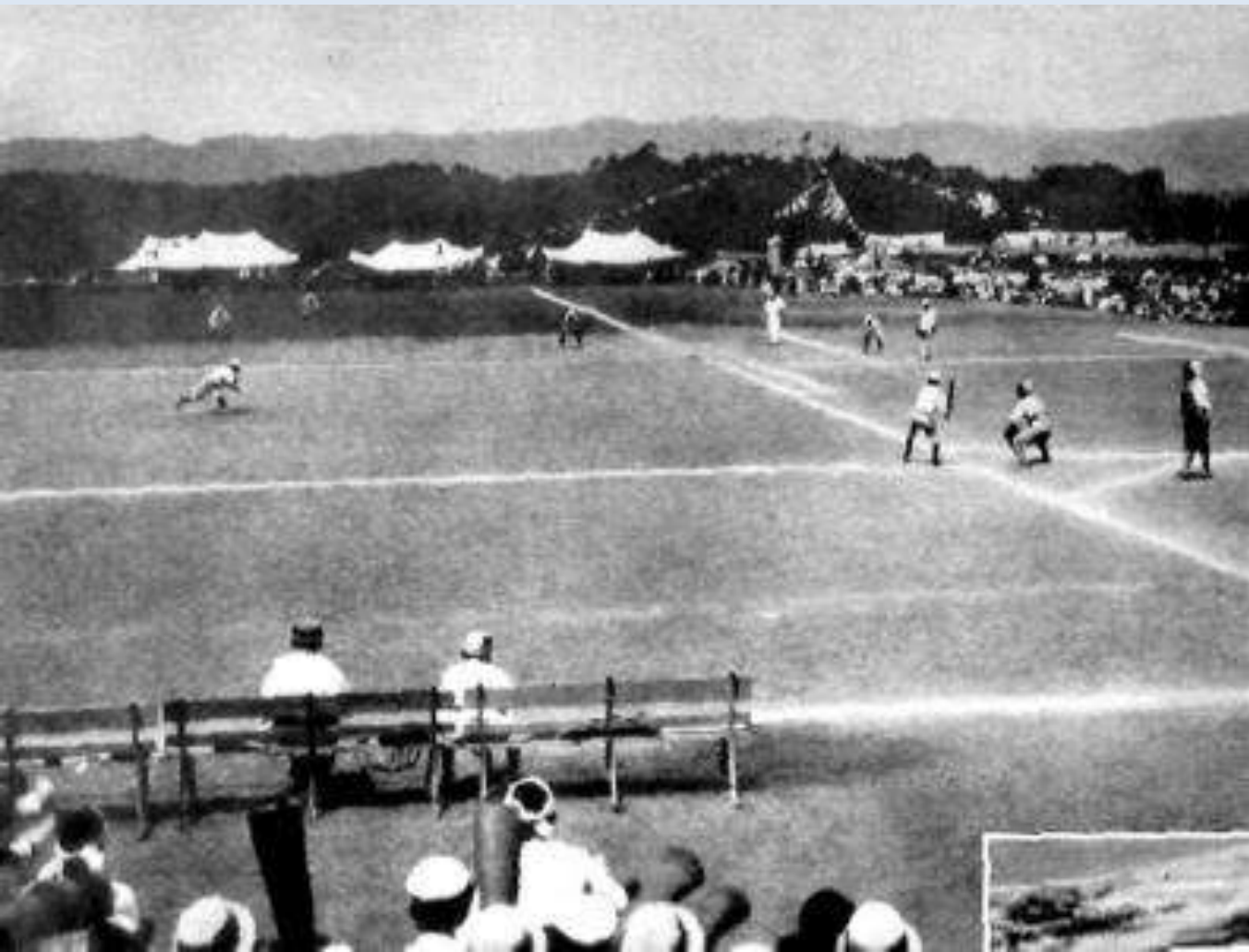
学生野球というアマチュア・スポーツの代表的な存在が、新聞の売り上げという商業的な側面と結びついていたのでした。



日本野球の発展

- 1911年（明治44） 8月29日～9月19日 東京朝日新聞連載コラム「野球害毒論」
- 1915年（大正4） 全国中等学校野球大会 **高校野球**の始まり（**大阪豊中球場**）
朝日新聞社主催
- 1924年（大正13） **甲子園球場の完成**
選抜中等学校野球大会の始まり（名古屋八事球場）
大阪毎日新聞主催
- 1927年（昭和2） 野球実況放送の開始（13回大会）
- 1931年（昭和6） 読売新聞社社長 正力松太郎がアメリカ大リーグを招待
（ベーブルース、ルーゲーリックなどの名選手）
大学選抜を中心とした日本チームと対戦する。18戦で1勝もできず。
- 1932年（昭和7） **野球統制令**「学校選手は職業選手と試合をおこなうをえざること」
学生野球の「興行化」「商業化」「選手のマネキン化」など批判

第一回全国中等学校野球大会 1915年(大正4)



大阪豊中球場



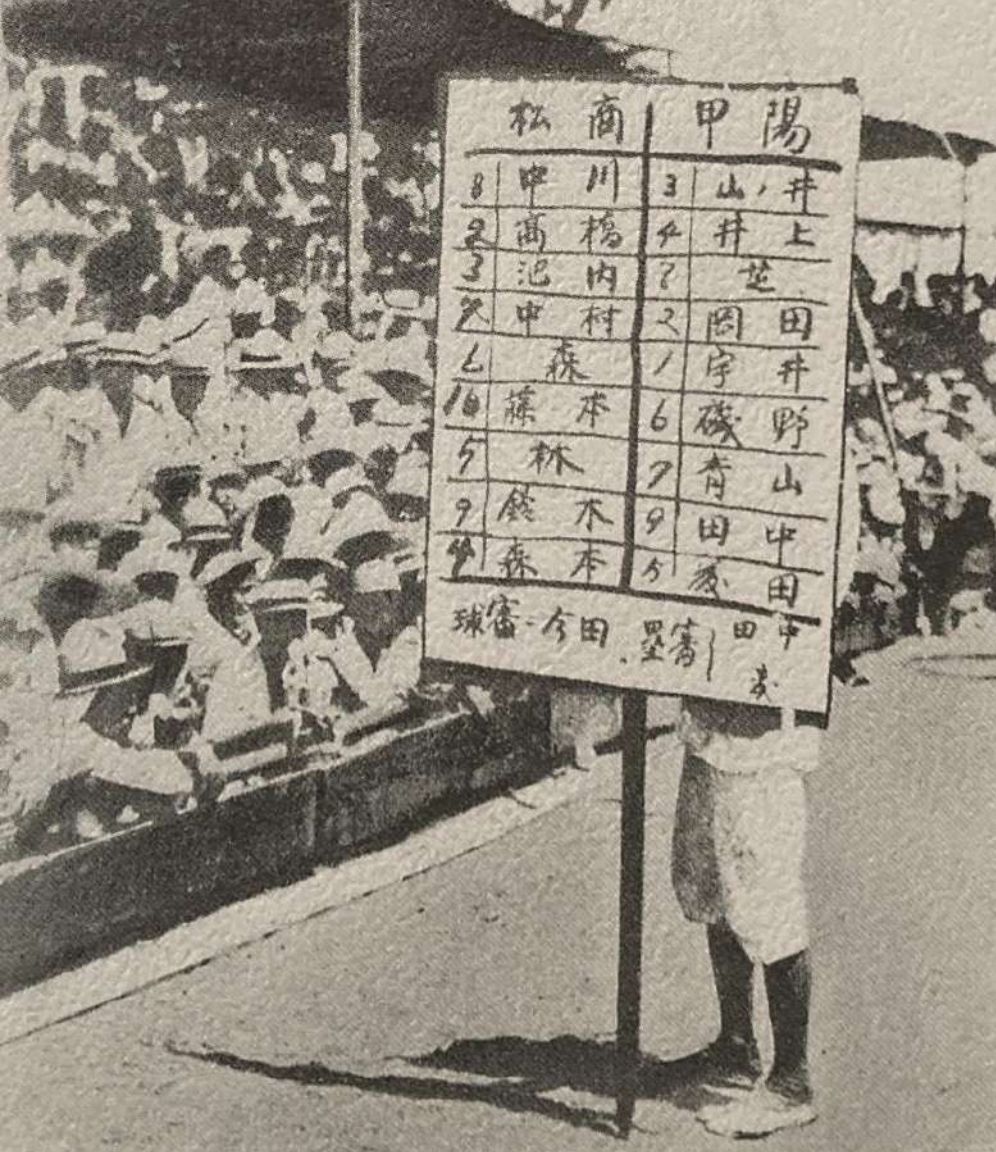
朝日新聞社社長による始球式

第一回全国中等学
校野球大会
1915年(大正4)

予選の様子。
審判は袴をはき、
キャッチャーにはプロ
テクターもない。

※アメリカでは、チェ
ストプロテクターが
1883年(明治16)に使
用されている。





昭和二年 初めてのラジオ放送開始



1923年（大正12年）大会
スコアボードはまだなく、ラインアップ
を書いた板を持って回った。



1924年（大正13年）に完成した甲子園球場 スタンドは満員で人気のすごさがうかがえる。



第19回大会 1933年（昭和8年） 歴史に残る死闘
準決勝 中京商業（愛知）対明石中学（兵庫）

ラジオ放送「吉田投手（中京）も中田投手（明石）も全選手ヘトヘトです。最後の力、人間以上のエネルギーを絞って闘っています。アンパイヤーも、全観衆も精根尽き果てて、場内はすっかりクタクタです。」

試合は延長25回の裏に一点が入り試合終了。中田投手247球、吉田投手336球を投げ、大観衆は両チームに大きな拍手を送り、球場は両チームを称える歓声で包まれる。

日本野球の発展

- 1931年(昭6) 満州事変が始まる。
- 1932年(昭7) **野球統制令**
- 1933年(昭8) 国際連盟脱退
- 1934年(昭9) アメリカ大リーグを招待。 **ベーブルース** 来日
初のプロ野球チーム **巨人軍** の設立。
- 1935年(昭10) **プロリーグの発足**
大阪タイガース、東京セネターズ、
名古屋軍、大東京、阪急、金鯱など7球団。
- 1937年(昭12) **日中戦争**が始まる 国民精神総動員運動
- 1941年(昭16) **太平洋戦争**が始まる
- 1943年(昭18) 東京六大学野球、都市対抗野球の中止、
敵国語の使用禁止
- 1944年(昭19) プロ野球の中止
- 1945年(昭20) **終戦** 7球団の復活
巨人 名古屋 阪急 阪神 南海 朝日 セネターズ
- 1946年(昭21) 公式戦の始まり

※戦前、プロ野球は始まっても客は集まらず、学生野球が4, 5万に対して、人気のあった巨人対タイガースさえ3千人の観客だった。



日米親善野球 1934年（昭和9年） ベーブルース来日



- ・日本にはプロチームはまだなく、全日本チームを作った。
- ・学生には素晴らしい選手がいたが、「野球統制令」があったために、学生は日本チームに入れなかった。（アメリカチームと試合をしたいために、野球部をやめてメンバーになった選手もいた。）
- ・試合結果は、7対0、10対0、14対0とアメリカチームが18戦全勝
- ・ベーブルースは13本のホームランを打つ。

東京倶楽部	
7	榎
4	本郷
8	片田
9	永井
3	宮武
5	窪寺
2	手塚
1	高橋
6	関口

11月4日 第1戦 明治神宮野球場

TEAM	1	2	3	4	5	6	7	8	9		R	H	E
東倶	0	0	0	0	1	0	0	0	0	...	1	6	4
全米	2	3	1	2	4	0	2	3	X	...	17	13	2

全米	
6	マクネア
4	ゲリンジャー
7	ルース
3	ゲーリッグ
5	フォックス
8	エヴィレル
9	ミラー
2	バーグ
1	ホワイトヒル

日本0勝
全米16勝

		日	米
1	11/4	●	1-17 ○
2	11/5	●	1-5 ○
3	11/8	●	2-5 ○
4	11/9	●	0-7 ○
5	11/10	●	0-10 ○
6	11/11	-	13-2 -
7	11/13	●	0-14 ○
8	11/17	●	6-15 ○
9	11/18	●	4-21 ○
10	11/20	●	0-1 ○
11	11/22	●	5-6 ○
12	11/23	●	2-6 ○
13	11/24	●	3-15 ○
14	11/25	-	5-1 -
15	11/26	●	1-8 ○
16	11/28	●	1-14 ○
17	11/29	●	5-23 ○
18	12/1	●	5-14 ○

全日本	
7	二出川
9	矢島
6	菊田
8	夫馬
3	山下
4	水原
2	久慈
5	新富
1	沢村

11月20日 第10戦 静岡草薙球場

TEAM	1	2	3	4	5	6	7	8	9		R	H	E
全日本	0	0	0	0	0	0	0	0	0	...	0	3	0
全米	0	0	0	0	0	0	1	0	X	...	1	5	0

全米	
6	マクネア
4	ゲリンジャー
3	ルース
7	ゲーリッグ
5	フォックス
8	エヴィレル
9	ミラー
2	ヘーズ
1	ホワイトヒル

勝利	ホワイトヒル	4勝0敗
敗戦	沢村	0勝2敗

本塁打	全日本	なし
	全米	ゲーリッグ5号(沢村)

6戦と、14戦は、ミラー軍、ルース軍に分かれた
日米混成チームでの試合。



- ・ 左足を高く上げるフォームから、うなりを投げる快速球と、鋭く落ちるカーブを武器に、9個の三振を奪う。
- ・ 7回にルー・ゲーリックにホームランを打たれ、0対1で負けるが、大打者をうちとる。この直後にプロ野球チーム **巨人軍** が誕生
- ・ 沢村はその後、巨人軍の中心選手として活躍。
- ・ 1944年（昭和19年）台湾沖で戦死（27歳）
- ・ 1947年沢村の功績を称え、巨人は背番号14を日本プロ野球史上初の **永久欠番** に指定。
- ・ 同年に **沢村栄治賞** が設立。

敵性語の禁止

敵性国となったアメリカやイギリスとの対立がより深まる1940年（昭和15年）に入ると、英語を「軽佻浮薄」（けいちょうふはく）と位置づけ「敵性」にあたるものだとして排斥が進んだ。野球用語は、日本語に変えての使用が始まった。

1ストライク、2ストライク	よし一本、よし二本
三振	よし三本、それまで
1ボール、2ボール、3ボール	一つ、二つ、三つ
四球	四つ、一塁へ
フェア	よし
ファウル	だめ
セーフ	よし
アウト	ひけ
ボーク	反則
インフィールドフライ	内野飛球

ここまでのまとめ

- ・日本の野球は、文明開化を進める明治政府の施策と共に輸入された。
- ・ホーレスウィルソンなどの外国人教師が授業のかたらわに行ったボールゲームを正岡子規などの学生が行う。
- ・ベースボールを野球と訳したのは、中馬庚だった。
- ・渡米して帰国した平岡瀨は、新橋アスレックスという野球チームを作る。
- ・野球は一高から始まりやがて、早慶戦が人気のある大会となる。
- ・中学大会（後の高校野球）が開かれ、甲子園球場が完成する。
- ・ベーブルースを始めとするアメリカチームが来日し、野球人気が高まる。
- ・戦後は、プロ野球から、野球が広がっていく。
- ・ベースボールが武士道野球になって行くのは、猛練習という鍛錬主義の練習が行われ、また当時、武道に求められる精神主義が野球にも求められていた。

スポーツと文化の授業
ーベースボールと野球ー

『星野君の二塁打』から

「星野君の二塁打」が発表されたのは戦後間もない1947年。
児童文学者の吉田甲子太郎（1894－1957）が、雑誌「少年」に掲載。
小学校高学年の道徳教材として取り上げられています。

野球とベースボールを考える材料として通読します。

【場面設定】

	1	2	3	4	5	6	7	計
T	0	0	0	0	0	0	2	2
N	1	1	0	0	0	0	1x	3

NクラブとTクラブとの試合 7回裏2対2の同点
岩田が一塁でバッター星野 監督のバントのサインを無視して二塁打を打ち二，三塁になる。
次のバッター中原が犠牲フライを打ち、Nクラブが勝つ



あなたは何派？（ミニレポート）

【質問 1】

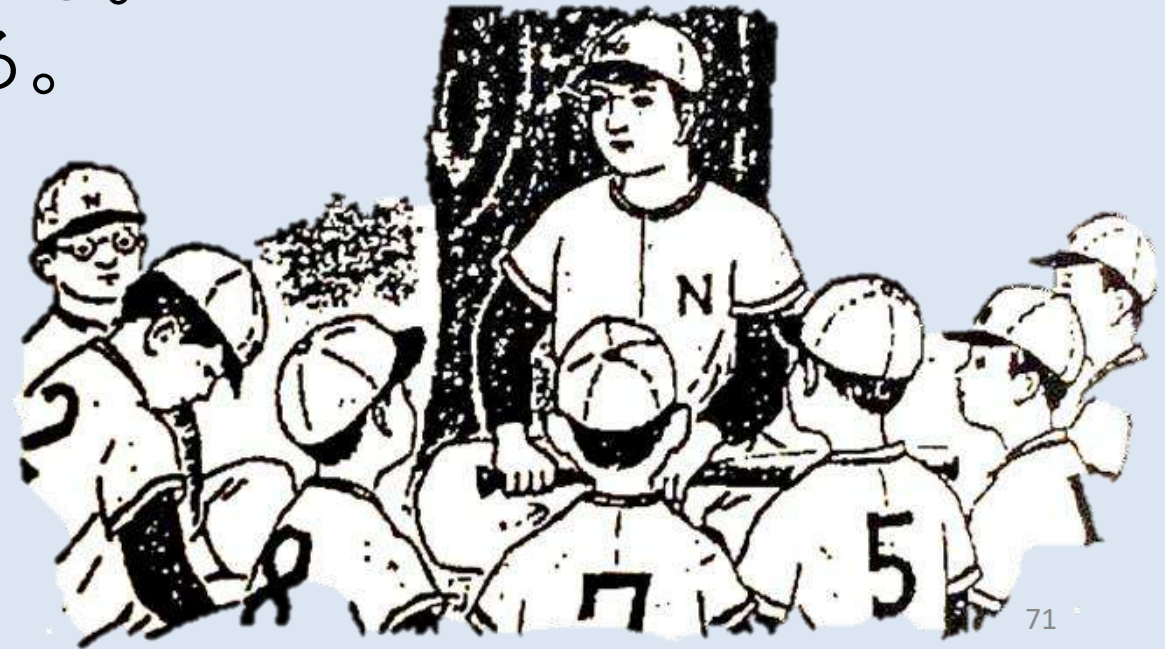
『星野君の二塁打』を読んで、あなたの立場は何派ですか？

- ①別府監督の言っていることに全面的に賛成
- ②どちらかというと別府監督に共感する。
- ③どちらかというと星野君に共感する。
- ④星野君の行動に全面的に賛成する。
- ⑤その他（ ）

【質問 2】

その理由は

【授業の感想】



『星野君の二塁打』あなたは何派？集計結果)2023年度

人数(%)	保育・幼児	学校・心理	総計
①別府監督の言っていることに全面的に賛成	1 (2.4%)	5 (12.5%)	6 (7.3%)
②どちらかというと別府監督に共感する。	14 (33.3%)	17 (42.5%)	31 (37.8%)
③どちらかというつ星野君に共感する。	23 (54.8%)	13 (32.5%)	36 (43.9%)
④星野君の行動に全面的に賛成する。	2 (4.8%)	5 (12.5%)	7 (8.5%)
⑤その他	2 (4.8%)	0 (0%)	2 (2.4%)
合計	42	40	82

学生の感想から

- ・『星野君の二塁打』に似たような場面はよくある話なので道徳からなくなるのは大変残念。
- ・星野君、別府監督双方を支持する理由が分かって良かった。
- ・「自分が星野君だったら…」という想定でこの問題を解決するのだから、選手-監督という人間関係も関わってくるのだと思う。監督という存在が絶対視されている今の現状はおかしいし、監督という言葉、そして、その有り様を点検する必要がある。
- ・別府さんに言われて何も言えないのは、今の社会の縮図だと思うし、自分の意見を言えない日本の野球体制の問題であると思う。それは、アメリカ野球での民主主義ではない。
- ・野球の問題は、スポーツ全体の問題。旧態依然とした考え方に、洗脳されているような状況が今のスポーツにあるのは悲しい。
- ・部活動を経験していたら、やっぱり別府監督を支持してしまう。日本の部活の思想が、練習や試合を通して、しみ込んでくるものだと思う。だから余計に、監督の有り様を問わなければならない。
- ・道徳のおかしさ：多くは星野君、別府監督双方の考えがわかるという中立的な立場が多いのに、それを認めない道徳の在り方が問題。授業でどちらかを強要されたので、道徳の授業は嫌だった。
- ・野球ではバントのような消極的な攻めは、本来の野球の持つ文化性に反している。他のスポーツでも相手のミスを誘うような攻めがあり、それで得点するというのは卑怯とはならないのか。倫理的な問題が絡んでいるのに、それを真正面から議論しないのがおかしい。

『星野君の二塁打』 「別府さん」のルーツへ

野球害毒論論争から、**武士道を基調とする日本の野球**の在り方が模索され、以下の3点が強調されました。

- ①凡てを正しく模範的に！
- ②武士道的儀礼をそなえ
- ③集団への献身と敢闘精神に溢れた野球（少年・青年）像

「爽やかで好ましい野球と青年」

＊チームへの献身や集団内の自己犠牲が強調されました。



これらを具現化したのが全国中学校優勝野球大会であり、そのスポンサーになったのが朝日新聞社でした。

（経営戦略－販売部数の拡大、私鉄沿線の開発等）

ベースボールと野球の対比

ベースボール

組織されたビジネス社会での成功（自由な競争）と「男らしさ」の発現としてのフェアプレーであり、判断力であり、正直さであり、すばやい思考であり、自制心であり、寛容さである。これらは、ベースボール文化の担い手が、市民やビジネス社会そのものであったことによる。

自己決定（決断力）
適材適所
社交（かつては）
民主主義⇒チームワークの重視（合意形成）

野球

道徳的価値観が自己目的化されており、自己犠牲や敢闘精神が求められる。
「教育の一環」としての「人間形成」や模範的行動が問われるのは、野球文化の担い手が「学校＝教育現場」に求められていたことによる。

優勝劣敗の勝利至上主義
武士道から来る精神主義
自己犠牲の精神
集団主義—日本精神へと拡大

星野君と別府さん

－考えを深めるために－

①二人の「性格」や「人柄」の問題ではなく、「野球」と「ベースボール」という文化的差異が議論の背後にあること。それを論評する私たち自身の内にも刷り込まれた「文化」が内在する。

②教育の論理とスポーツの論理

③民主主義とは何か？・・・合意形成がなされたのかどうか？

※一方的な「道徳的基準」で星野君を「自己犠牲のわからない人間は…」と「悪者」として決めつけることはできない。

発問1 星野くんがバントの指示を守らなかった判断について、どう思いますか？

なぜ、反対？

- C 監督の意見を見無視するのはリスクが高い
- C みんなで決めたことだから、約束を破って勝ってもきもちよくない
- C 監督は経験者。過去にも同じようなケースがあってバントの指示を出しているから、従うべき

なぜ、賛成？

どちらも
言えない

- C 個人的には打ちたいと思う。自分だったら打ってしまう

- C 星野くんのヒットでチームが勝てたから
- C バントをしたら負けていたかもしれないから

POINT!

少数派の意見の価値観も十分に認め無理にひとつの考えに誘導することのないよう留意しながら、子供たちの意見を聞きます。

きまりを守らない星野君で良いのか？

○規則の尊重 出典:『新しい道徳 6年生』東京書籍

【本時のねらい】自分の権利を十分に尊重する中で果たすべき自らの義務を考え、進んで約束やきまりを守って行動しようとする実践意欲と態度を育てる。

補助発問 星野くんは次の試合で「控え」にまわることになりましたが、もし、次の試合も出場できるとしたら考えは変わりますか？

⇒今回は勝ったとしても、みんなが自分勝手なことをしていつかは負けてしまう。チームの関係が悪くなってしまう。

補助発問 もし、監督の指示を聞かずにバントをせず負けてしまったらどうなると思いますか？

⇒なんで打ったのかと思われる。自分で自分をせめてしまう。

補助発問 では、作戦どおりにバントをして負けたとしたらどうなるでしょうか？

⇒負けても助け合うことができるチームになれる。チームワークが高まる。

補助発問 作戦どおりやって勝てたらどうですか？

⇒うれしい。きもちいい。

発問2 今日感じたことを自分たちの生活場面で考えてみましょう。きまりを守ることとはなぜ大切なのでしょうか。

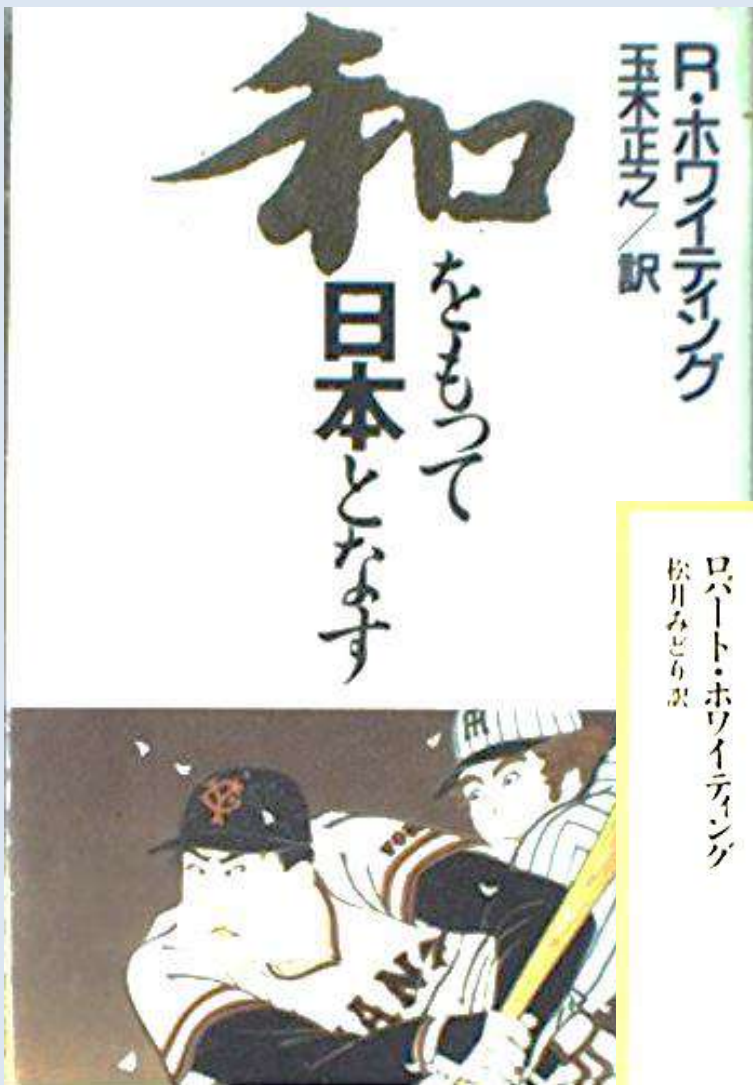
●「みんなはひとりのためにひとはみんなのために」が大切だと思いました。

●きまりを守らないとチームメイトのみんながばらばらになってしまうし、クラスのことと考えたらきまりを守らなかったら楽しくなくなってしまうから、守ろうと思いました。

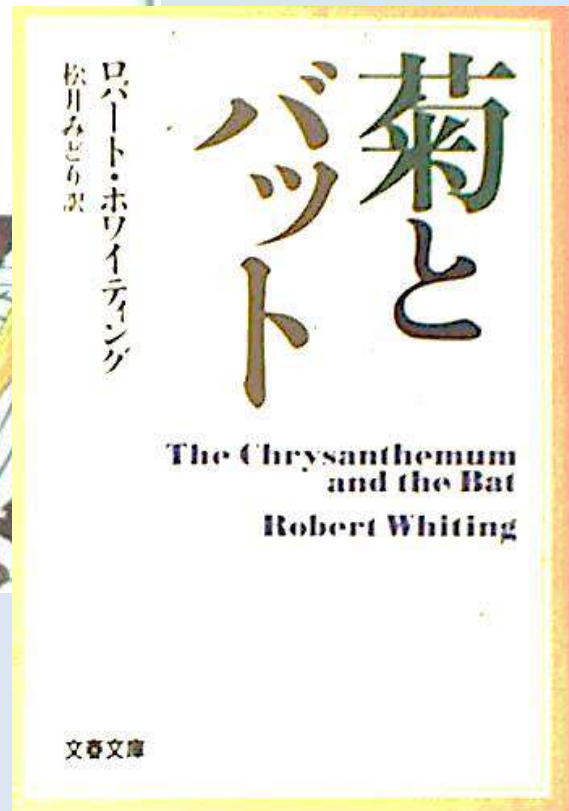


補助発問により、きまりを守ることの大切さを教え込み、星野君はきまりを守らない悪いお手本となってしまう。

…道徳教材としての限界



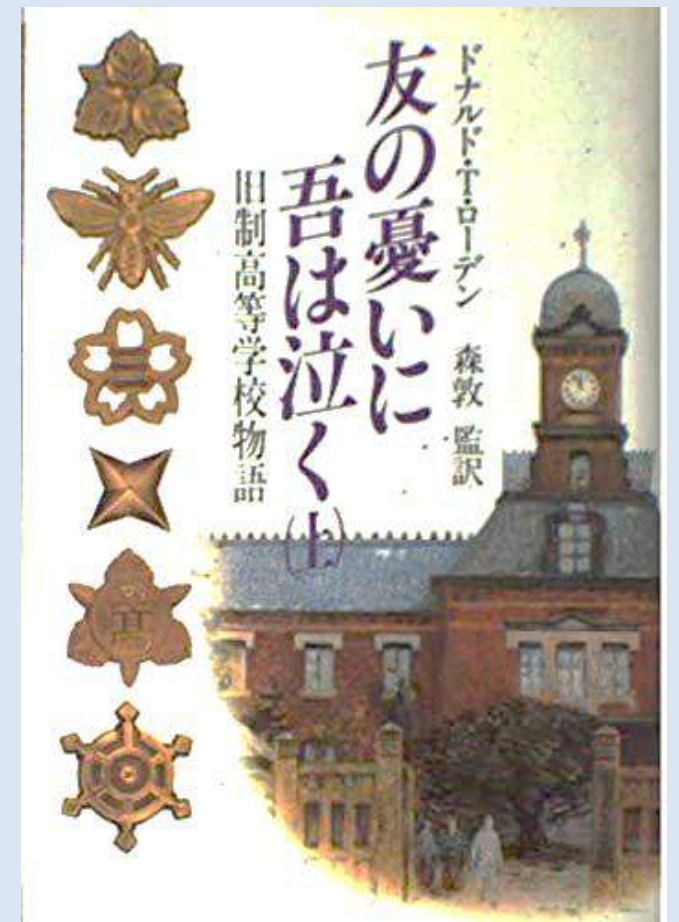
1992年



1991年



1998年



1983年

娯楽である野球が、武道精神や武士道という日本の伝統的な文化と出会い、精神修養の道具へと変容した。
(R・ホワイティング)



武士道野球とし日本野球を批判

ドナルド・T・ローデン『明治期日本における野球と国家的権威の追求』

…国家の中枢の担い手となっていく学生たちは、リーダーシップや勇気、忍耐、規律、団結力といった国家のエリートに不可欠の資質がなによりもスポーツによって養われるという強い信念をいだくようになった。かくして、**帝国主義とエリートとスポーツ、これら三つが強固に結びつく時代がおとずれた**のであり、日本もその例外ではなかった。

R・ホワイティング『和をもって日本となす』『菊とバット』

アメリカの**娯楽である野球が、武道精神や武士道という日本の伝統的な文化と出会い、精神修養の道具へと変容**…「**武道的色彩の濃い野球**」を展開した典型が一高野球部であり、また、そのような野球観を日本に浸透させていくうえでもっとも重要な役割を果たしたのが、“野球の父”と呼ばれた飛田穂洲（すいしゅう）であり、その影響は今なお根強く残っている。

「日本人のベースボールの指導者たちは、最初からこのスポーツを剣道と同じような精神修養の一種と見なした。つまり**純粋な精神を磨き、自己鍛錬するための教育的道具と考えた**のである。そのため、延々と続けられる終わりのないような練習のなかで、精神面を重視し、無私の精神を培うといった武道精神を野球に持ち込んだのだった。」 R・ホワイティング『和をもって日本となす』 57頁

野球が武士道や武道精神といった伝統によって変容した。

(ローデン、ホワイティング、佐山らの主張)

↑

坂上康博氏の批判

- ・ 士族階級の子弟が野球部に属する割合が一高時代の始まりと終わりとは（70%→36%）と減っている。
- ・ 武道が学校当局によって奨励される一方で、**野球の対抗試合禁止という否定、抑圧**という状況から、野球も武術に劣らない側面があるという主張をせざるを得なかったという状況があったこと。
- ・ 従来の発想は、**野球に対する抑圧からの解放や自治的な発展をめざしたものであった**というポジティブな側面等を見えなくしてしまっている。
- ・ 日本の野球をはじめとするスポーツにおいて、非合理的な練習や集団内での上下関係（それによる体罰や暴力）などが肯定されてきたのは、勝利、人間形成、集団の秩序という3つの強力な正当化の論理が存在するからであり、それは**戦後、高度経済成長期をへて浸透していったもの**ではないか。（1950年が転機とする）



野球否定の動きに対する闘い

坂上康博氏の主張

①1891年(明治24)「校友会雑誌」での撃剣とベースボール 外来文化への批判

撃剣の価値を士気を養成する所にあり、スポーツを子どもの遊びとして蔑視。伝統文化の価値は教育勅語(1890)の国家的な価値と同じである。

⇒中馬庚は、野球も「心胆を練り機智を養うに足る」と反論、野球も健康の増進と気晴らしに寄与し武術と同等の価値を持つ。また、野球は食後の前後や空き時間に「学窓の鬱を散するに最良の運動の一なり」と主張。

②『野球部史』(1903)での変化

中馬庚は『野球』で「野球は撃剣、柔道や器械体操にはない「**快樂**」を与えることができる」としていたが、野球部員たちの手で書かれた『野球部史』では、野球の価値を武術と同じ精神修養という点に定め、「武士的精神」を養成する効果があると主張。

③日清戦争後、野球を肯定する立場の学校が出現する一方で、野球部の対外試合を禁止する学校もあった。それに対して、柔道や撃剣と並ぶ**野球の価値が精神修養にある**と主張しなければならなかった。

野球否定の動きに対する闘い

坂上康博氏の主張

④野球害毒キャンペーン(1911年)

熱狂的ブームとなった野球への批判、弾圧。その後の対外試合の抑制、武術にかわって相撲の奨励、このような状況の中で、**安部磯雄**、**押川春浪**らが野球擁護の論陣を張る。

⑤戦時体制の中、野球統制令(1932)が出され、武装奨励、野球否定の風潮が高まる。その中、**飛田穂洲**が、野球が武道に劣らぬ価値をもつものであることを主張する。その中で、「一高建部の精神」を訴え、アマチュアスポーツの健全な発展を説く。



①～⑤を通し、野球は常に武道との対比で、抑圧、否定されてきており、それに対する闘いの歴史でもあった。武道に劣らない野球の価値を強調する中で、中馬庚の言う野球本来のもつ「快楽」が失われ、人間形成を育むための精神修養を基調とするものに変質していったと言えるのではないか。

⑥勝利至上主義、部内の上下関係、非科学的なトレーニングが行われるようになったのは、1950年代の後半から。日本の高度経済成長と見事に符合する。「根性」という言葉が使われ出したのもこの頃から。

はなしのまとめとして

- ・明治維新になり急速に外来文化を受け入れベースボールが伝わります。しかし、間もなく教育の思想・統制を目的とした教育勅語(1890)が發布されると共に、伝統文化が見直されます。それ以降は、常にベースボールは、抑圧と否定という歴史の中で、野球にも精神修養的な側面があるのだとその価値を強調しなければならなかったのです。
- ・野球の価値を説き、守ろうとした野球擁護派の闘いの歴史に目を向けなければならないというのが坂上氏の主張の斬新さだったと思います。また、坂上氏は武士道野球（私の見解では部活問題の象徴）の問題が表面化するのには1950年代からだと言います。
- ・明治期に伝わったベースボールには、社交や親睦が内在していたはずです。それが、武道との対比で、精神修養が野球にもあることを強調したために、平岡濤や正岡子規が味わった楽しみ、また、中馬庚のいう「快樂」がなりを潜めてしまったのは残念なことです。
- ・プレイ場面だけでなく、ゲーム後の親睦を含めたものがベースボールでした。東京開成高校と横浜居留民の試合にしろ、ヘラクレス倶楽部の試合にしろ、もてなしを含めた文化がベースボールだったのです。今の野球にはそれがあるのでしょうか？社交・親睦の野球の復権を！

1876年(明治9)のベースボール試合

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
横浜居留民チーム(外国人)	5	1	0	2	7	12	7	?	?	34
東京開成高校(学生)	0	1	6	0	0	1	3	?	?	11

1876年(明治9) 東京開成高校と横浜居留民が対戦して、11対34で外国人チームが勝利しています。これは、日本における初の国際試合と言えます。

当時は既に21点先取制から9回制になったルールで試合が行われていますが、スコアを見ると、7回で終わっています。その理由は、横浜から来ているメンバーが汽車に乗り遅れないためということになっていますが、横浜から来た選手を歓迎するパーティーのために早く切り上げたという説もあります。

プレイ場面だけでなくベースボールの様式そのものが輸入されたことを考えれば、ゲームの後に行われるパーティーは不可欠であり、当時はまだ、社交・親睦を重んじるベースボールであったことを推し量ることができます。

ヘラクレス倶楽部

- ・ 1880（明治13）年、新橋アスレチック倶楽部に次ぐ日本で2番目の野球チームとして誕生。
- ・ 田安德川家の当主で、その後、大正天皇の侍従長を務めることになる徳川達孝であり、家庭教師として彼に英語を教えていたのがアメリカ帰りの平岡だった。
- ・ 三田綱町（現在の港区三田2丁目周辺）にあった広い邸宅内に運動場を造り、野球チームを作って新橋アスレチック倶楽部と試合を行うようになった。
- ・ 達孝は1人でも多くの人に見てもらい、野球の面白さを知ってもらおうと茶菓子を用意し、運動場を訪れた人たちを一生懸命もてなした。
- ・ 1888（明治21）年、慶應野球部の前身「三田ベースボール倶楽部」の誕生へとつながっていく。